

国立天文台編

理科年表

平成24年 第85冊

2012

丸善出版

甲第2/
号証

日本付近のおもな被害地震年代表

有史以来のおもな被害地震を選んだ。震央の位置、マグニチュード、地域および名称は、1884年までは宇佐美(2003)と宇津(1999)、1885年から1923年7月までは茅野・宇津(2001)を引用した。1923年8月以降は気象庁がFTPサイトで公開した値である。年月日は最初にグレゴリオ暦、かっこ内に日本暦を示した。地域は1884年までは被災地等であり、1885年以降は震央地名(1923年以降は気象庁の区分)を表す。³などの数字は宇津の被害等級である。

被害摘要は旧版被害地震年代表や宇佐美(2003)、宇津(1999)、茅野・宇津(2001)、消防庁災害情報などをもとに記述した。1996年以降の震度は計測震度。全壊、半壊などは棟数を表す。1872年以前の記事に現れる日付は、原則として日本暦に対応する。記事の最後の〔 〕内は今村・飯田による津波規模である。

平成17年版より地震の選択基準を原則「死者1名以上または家屋等の全壊(潰)1以上または津波規模1以上」とし1885年まで遡って適用した。また、平成23年版よりグローバルCMTプロジェクトによるモーメントマグニチュードを記号Mwとともに併記した。ただし、*印は防災科研や文献の値。

被害等級、津波規模、モーメントマグニチュードについては地震関係公式諸表を参照。地震名は「地震学」第3版に従った。

引用文献

宇佐美竜夫：最新版日本被害地震総覧、東京大学出版会、2003。

宇津徳治：地震活動総説、東京大学出版会、1999。

茅野一郎・宇津徳治：日本の主な地震の表、「地震の事典」、第2版、朝倉書店、2001。

番号	西暦(日本暦) 北緯 東経 M=マグニチュード/地域:(名称:)被害摘要
1	416 8 23 (允恭 5 7 14) 遠飛鳥宮付近(大和)：「日本書紀」に「地震」とあるのみ。被害の記述はないが、わが国の歴史に現れた最初の地震。
2	599 5 28 (推古 7 4 27) M7.0 大和：倒壊家屋を生じた。「日本書紀」にあり、地震による被害の記述としてはわが国最古のもの。
3	679 - - (天武 7 12 -) M6.5~7.5 筑紫：家屋の倒壊多く、幅2丈、長さ3千余丈の地割れを生じた。
4	684 11 29 (天武 13 10 14) M≈8 ¼ 土佐その他南海・東海・西海地方：山崩れ、河湧き、家屋社寺の倒壊、人畜の死傷多く、津波来襲して土佐の船多数沈没。土佐で田苑50余万頃(約12 km ²)沈下して海となった。南海トラフ沿いの巨大地震と思われる。 ^[3]
5	701 5 12 (大宝 1 3 26) 丹波：地震うこと3日。若狭湾内の凡海郷が海に没したという「冠島伝説」があるが、疑わしい。
6	715 7 4 (靈龜 1 5 25) 35.1°N 137.8°E M6.5~7.5

番号	西暦(日本暦) 北緯 東経 M=マグニチュード/地域:(名称:)被害摘要
7	遠江：山崩れが天竜川を塞いだ。数十日後決壊、民家170余戸が水没した。 715 7 5 (靈龜 1 5 26) 34.8°N 137.4°E M6.5~7.0 三河：正倉47破壊、民家に陥没したものがあった。
8	734 5 18 (天平 6 4 7) 畿内・七道諸国：民家倒壊し圧死多く、山崩れ、川塞ぎ、地割れが無数に生じた。
9	745 6 5 (天平 17 4 27) 35.2°N 136.6°E M≈7.9 美濃：櫓館・正倉・仏寺・堂塔・民家が多く倒壊し、揖斐では余震が20日間止まなかった。
10	762 6 9 (天平宝字 6 5 9) 美濃・飛騨・信濃：被害不詳。罹災者に対し1戸につき穀物2斛を賜った。
11	818 - - (弘仁 9 7 -) M≥7.5 関東諸国：山崩れ谷埋まること数里、百姓が多数圧死した。從来、津波があつたとされていたが、おそらく洪水であろう。
12	827 8 11 (天長 4 7 12) 35.0°N 135 ¾°E M6.5~7.0 京都：舎屋多く潰れ、余震が翌年6月まであった。
13	830 2 3 (天長 7 1 3) 39.8°N 140.1°E M7.0~7.5 出羽：秋田の城郭・官舎・寺社悉く倒れる。家屋も倒壊し、圧死15、傷100余。地割れ多く、河岸の崩れや川の氾濫があった。
14	841 - - (承和 8 - -) 36.2°N 138.0°E M≥6.5 信濃：堀屋が倒壊した。同年2月13日以前の地震。
15	841 - - (承和 8 - -) 35.1°N 138.9°E M≈7.0 伊豆：里落完からず、死者があった。同年5月3日以前の地震。丹那断層の活動によるものか？
16	850 - - (嘉祥 3 - -) 39.0°N 139.7°E M≈7.0 出羽：地裂け、山崩れ、国府の城柵は傾傾し、圧死多数。最上川の岸崩れ、海水は国府から6里のところまで迫った。 ^[2]
17	856 - - (齊衡 3 3 -) M6~6.5 京都：京都およびその南方で屋舎が破壊し、仏塔が傾いた。
18	863 7 10 (貞觀 5 6 17) 越中・越後：山崩れ、谷埋まり、水湧き、民家破壊し、圧死多数。直江津付近にあった数個の小島が潰滅したといふ。
19	868 8 3 (貞觀 10 7 8) 34.8°N 134.8°E M≥7.0 播磨・山城：播磨諸郡の官舎・諸定額寺の堂塔ことごとく頽れ倒れた。京都では垣屋に崩れたものがあった。山崎断層の活動によるものか？
20	869 7 13 (貞觀 11 5 26) 38.5°N 144°E M8.3 Mw8.4* 三陸沿岸：「貞觀の三陸沖地震」：城郭・倉庫・門櫓・垣壁など崩れ落ち倒壊するもの無数。津波が多賀城下を襲い、溺死約1千。流光屋のごとく隠映すといふ。三陸沖の巨大地震とみられる。Mwは津波堆積物の調査による。 ^[4]
21	878 11 1 (元慶 2 9 29) 35.5°N 139.3°E M7.4 関東諸国：相模・武藏が特にひどく、5~6日震動が止まなかった。公私の屋舎一つも全きものなく、地陥り往還不通となる。圧死多数。京都で有感。
22	880 11 23 (元慶 4 10 14) 35.4°N 133.2°E M≈7.0

番号	西暦(日本暦) 北緯 東経 M=マグニチュード/地域:(名称:)被害摘要
23	出雲:社寺・民家の破損が多く、余震は10月22日に至るも止まらなかった。この日京都でも強く感じたというがこの地震とは無関係で、規模ももっと小さかったとする説がある。 881 1 13 (元慶 4 12 6) M6.4 京都:宮城の垣牆・官庁・民家の頽損するものはなはだ多く、余震が翌年まで続いた。
24	887 8 26 (仁和 3 7 30) 33.0°N 135.0°E M8.0~8.5 五畿・七道:京都で民家・官舎の倒壊多く、圧死多数。津波が沿岸を襲い溺死者多数、特に摂津で津波の被害が大きかった。南海トラフ沿いの巨大地震と思われる。[3]
25	890 7 10 (寛平 2 6 16) M≈6.0 京都:家屋傾き、ほとんど倒壊寸前のものがあった。
26	934 7 16 (承平 4 5 27) M≈6.0 京都:午刻に地震2回、京中の築垣が多く転倒した。
27	938 5 22 (天慶 1 4 15) 35.0°N 135.8°E M≈7.0 京都・紀伊:宮中の内膳司頽れ、死4。舎屋・築垣倒れるもの多く、堂塔・仏像も多く倒れる。高野山の諸伽藍破壊。余震多く、8月6日に強震があった。
28	976 7 22 (貞元 1 6 18) 34.9°N 135.8°E M≥6.7 山城・近江:両京で屋舎・諸仏寺の転倒多く、死50以上。近江の国府・国分寺・関寺(大津市)で被害。余震が多かった。
29	1038 -- (長曆 1 12 --) 34.3°N 135.6°E 紀伊:高野山中の伽藍・院宇に転倒するもの多かった。
30	1041 8 25 (長久 2 7 20) 京都:法成寺の鐘楼が転倒した。
31	1070 12 1 (延久 2 10 20) 34.8°N 135.8°E M6.0~6.5 山城・大和:東大寺の巨鐘の鉦が切れて落ちた。京都では家々の築垣に被害があった。
32	1091 9 28 (寛治 5 8 7) 34.7°N 135.8°E M6.2~6.5 山城・大和:法成寺の仏像倒れ、その他の建物・仏像にも被害。大和国金峯山金剛藏王宝殿が破損した。
33	1093 3 19 (寛治 7 2 14) M6.0~6.3 京都:所々の塔が破損した。
34	1096 12 17 (永長 1 11 24) M8.0~8.5 畿内・東海道:大極殿小破、東大寺の巨鐘落ちる。京都の諸寺に被害があつた。近江の勢多橋落ちる。津波が伊勢・駿河を襲い、駿河で社寺・民家の流失400余。余震が多かった。東海沖の巨大地震とみられる。[2]
35	1099 2 22 (康和 1 1 24) M8.0~8.3 南海道・畿内:興福寺・摂津天王寺で被害。土佐で田千余町みな海に沈む。津波があつたらしい。
36	1177 11 26 (治承 1 10 27) 34.7°N 135.8°E M6.0~6.5 大和:東大寺で巨鐘が落ちるなどの被害。京都でも地震が強かった。
37	1185 8 13 (文治 1 7 9) 35.0°N 135.8°E M≈7.4 近江・山城・大和:京都、特に白河辺の被害が大きかった。社寺・家屋の倒

番号	西暦(日本暦) 北緯 東経 M=マグニチュード/地域:(名称:)被害摘要
38	潰破損多く死多数。宇治橋落ち、死1。9月まで余震多く、特に8月12日の強い余震では多少の被害があった。 1213 6 18 (建保 1 5 21) 鎌倉:山崩れ、地裂け、舎屋が破壊した。
39	1227 4 1 (安貞 1 3 7) 鎌倉:地裂け、所々の門扉・築垣が転倒した。
40	1230 3 15 (寛喜 2 闇 1 22) 鎌倉:大慈寺の後山が頽れた。
41	1240 3 24 (仁治 1 2 22) 鎌倉:鶴岡神宮寺風なくして倒れ、北山が崩れた。
42	1241 5 22 (仁治 2 4 3) M≈7.0 鎌倉:津波を伴い、由比ヶ浜大鳥居内拝殿流失、岸にあった船10艘が破損した。[1]
43	1245 8 27 (寛元 3 7 27) 京都:壁・築垣や所々の屋々に破損が多かった。
44	1257 10 9 (正嘉 1 8 23) 35.2°N 139.5°E M7.0~7.5 関東南部:鎌倉の社寺完きものなく、山崩れ、家屋転倒し、築地ことごとく破損。地割れを生じ、水が湧きでた。余震多数。同日三陸沿岸に津波が来襲したというが、疑わしい。
45	1293 5 27 (永仁 1 4 13) M≈7.0 鎌倉:鎌倉強震、建長寺ほとんど炎上のほか、諸寺に被害。死数千あるいは2万3千余。余震が多かった。この日、越後魚沼郡で山崩れあり死多数というも、この地震との関係不明。
46	1317 2 24 (文保 1 1 5) 35.0°N 135.8°E M6.5~7.0 京都:これより先1月3日京都に強震、余震多く、この日大地震。白河辺の人家悉く潰れ、死5。諸寺に被害、清水寺出火。余震が5月になつても止まなかつた。
47	1325 12 5 (正中 2 10 21) 35.6°N 136.1°E M6.5 近江北部・若狭:荒地・中山崩れる。竹生島の一部が崩れて湖中に没した。越前国敦賀郡の氣比神宮倒壊。京都で強く感じ、余震が年末まで続いた。
48	1331 8 15 (元弘 1 7 3) 33.7°N 135.2°E M≥7.0 紀伊:紀伊国千里浜(田辺市)の遠干潟20余町が隆起して陸地となつた。
49	1350 7 6 (正平 5 5 23) 35.0°N 135.8°E M≈6.0 京都:祇園社の石塔の九輪が落ち碎けた。余震が7月初旬まで続いた。
50	1360 11 22 (正平 15 10 5) 33.4°N 136.2°E M7.5~8.0 紀伊・摂津:4日に大震、5日に再震、6日の六ツ時過ぎに津波が熊野尾鷲から摂津兵庫まで来襲し、人馬牛の死が多かった。[2]
51	1361 8 1 (正平 16 6 22) 畿内諸国:この月18日より京都付近に地震多く、この日の地震で法隆寺の築地多少崩れる。23日にも地震あり。次の地震の前震か?
52	1361 8 3 (正平 16 6 24) 33.0°N 135.0°E M8 1/4~8.5 畿内・土佐・阿波:摂津四天王寺の金堂転倒し、圧死5。その他、諸寺諸堂に被害が多かった。津波で摂津・阿波・土佐に被害、特に阿波の雪(由岐)湊で

番号	西暦(日本暦) 北緯 東経 M=マグニチュード/地域:(名称:)被害摘要
53	流失 1700 戸、流死 60 余。余震多数。南海トラフ沿いの巨大地震と思われる。 [3]
54	1408 1 21 (応永 14 12 14) 33.0°N 136.0°E M7.0~8.0 紀伊・伊勢:熊野本宮の温泉の湧出 80 日間止まる。熊野で被害があったとい う。紀伊・伊勢・鎌倉に津波があったようである。[1]
55	1425 12 23 (応永 32 11 5) 35.0°N 135.8°E M=6.0 京都:築垣多く崩れる。余震があり、この日終日震う。
56	1433 11 7 (永享 5 9 16) 34.9°N 139.5°E M≥7.0 相模:相模大山仁王の首落ちる。鎌倉で社寺・築地の被害が多かった。当 時東京湾に注いでいた利根川の水が逆流、津波か? 余震が多かった。[1]
57	1449 5 13 (宝徳 1 4 12) 35.0°N 135.4°E M5 4/4~6.5 山城・大和:10 日から地震があった。洛中の堂塔・築地に被害多く、東山・ 西山で所々地裂ける。山崩れで人馬の死多数。淀大橋・桂橋落ちる。余震が 7 月 まで続いた。
58	1456 2 14 (康正 1 12 29) 紀伊:熊野神社の宮殿・神倉崩れる。京都で強震?
59	1466 5 29 (文正 1 4 6) 京都:天満社・糺社の石灯籠倒れる。
60	1494 6 19 (明応 3 5 7) 34.6°N 135.7°E M=6.0 大和:諸寺破損、矢田庄(大和郡山の西)の民家多く破損。余震が翌年に及 んだ。
61	1498 7 9 (明応 7 6 11) 33.0°N 132.4°E M7.0~7.5 日向灘:九州で山崩れ、地裂け泥湧出。民屋はすべてこわれ死多数。伊予で 地変。同日畿内に地震、被害はなかったらしい。同じ地震であれば震域が広く、 震央に変更が必要。
62	1498 9 20 (明応 7 8 25) 34.0°N 138.0°E M8.2~8.4 東海道全般:紀伊から房総にかけての海岸と甲斐で振動が大きかったが、震 害はそれほどでもない。津波が紀伊から房総の海岸を襲い、伊勢大瀬で家屋流 失 1 千戸、溺死 5 千、伊勢・志摩で溺死 1 万、静岡県志太郡で溺死 2 万 6 千な ど。南海トラフ沿いの巨大地震とみられる。[3]
63	1502 1 28 (文亀 1 12 10) 37.2°N 138.2°E M6.5~7.0 越後南西部:越後の国府(現直江津)で漁家、死多数。会津でも強く揺れた。
64	1510 9 21 (永正 7 8 8) 34.6°N 135.6°E M6.5~7.0 摂津・河内:摂津・河内の諸寺で被害。大阪で漁死者があった。余震が 70 余 日続く。
65	1517 7 18 (永正 14 6 20) 越後:倒家が多かった。史料少なく詳細不明。
66	1520 4 4 (永正 17 3 7) 33.0°N 136.0°E M7.0~7 3/4 紀伊・京都:熊野・那智の寺院破壊。津波があり、民家流失。京都で禁中の 築地所々破損した。[1]
67	1525 9 20 (大永 5 8 23) 鎌倉:由比ヶ浜の川・入江・沼が埋まって平地となった。27 日まで昼夜地震 があった。

番号	西暦(日本暦) 北緯 東経 M=マグニチュード/地域:(名称:)被害摘要
67	1579 2 25 (天正 7 1 20) 34.7°N 135.5°E M6.0 摂津:四天王寺の鳥居崩れ、余震 3 日にわたる。
68	1586 1 18 (天正 13 11 29) 36.0°N 136.9°E M=7.8 畿内・東海・東山・北陸諸道:飛騨白川谷で大山崩れ、帰雲山城、民家 300 余 戸埋没し、死多数。飛騨・美濃・伊勢・近江など広域で被害。阿波でも地割れ を生じ、余震は翌年まで続いた。震央を白川断層上と考えたが、伊勢湾とする 説、二つの地震が続発したとする説などがあり、不明な点が多い。伊勢湾に津 波があったかもしれない。
69	1589 3 21 (天正 17 2 5) 34.8°N 138.2°E M6.7 駿河・遠江:民家多く破損し、興國寺・長久保・沼津などの城堀が破壊した。
70	1596 9 1 (慶長 1 閏 7 9) 33.3°N 131.6°E M7.0 豊後:前月より前震があったらしい。この日の大地震で高崎山など崩れ、八 幡村作原八幡社拝殿など倒壊。海水が引いた後大津波が来襲し、別府湾沿岸で 被害。大分などで家屋ほとんど流失。「瓜生島」(大分の北にあった沖ノ浜とさ れる) の 80 % 陥没し、死 708 という。[2]
71	1596 9 5 (慶長 1 閏 7 13) 34.65°N 135.6°E M7 3/4 畿内:京都では三条より伏見の間で被害が最も多く、伏見城天守大破、石垣 崩れて圧死約 500。諸寺・民家の倒壊も多く、死傷多数。堺で死 600 余。奈良・ 大阪・神戸でも被害が多かった。余震が翌年 4 月まで続いた。
72	1605 2 3 (慶長 9 12 16) A: 33.5°N 138.5°E M7.9 B: 33.0°N 134.9°E M7.9 東海・南海・西海諸道:「慶長地震」:地震の被害としては淡路島安坂村千光 寺の諸堂倒れ、仏像が飛散したとあるのみ。津波が犬吠崎から九州までの太平 洋岸に来襲して、八丈島で死 57、浜名湖近くの橋本で 100 戸中 80 戸流され、死 多数。紀伊西岸広村で 1700 戸中 700 戸流失、阿波宍喰で波高 2 文、死 1500 余、 土佐甲ノ浦で死 350 余、崎浜で死 50 余、室戸岬付近で死 400 余など。ほぼ同時 に二つの地震が起きたとする考え方と、東海沖の一つの地震とする考え方がある。 [3]
73	1611 9 27 (慶長 16 8 21) 37.6°N 139.8°E M=6.9 会津:若松城下とその付近で社寺・民家の被害が大きく、死 3700 余。山崩れ が会津川・只見川を塞ぎ、南北 60 km の間に多数の沼を作った。
74	1611 12 2 (慶長 16 10 28) 39.0°N 144.0°E M8.1 三陸沿岸および北海道東岸:「慶長の三陸沖地震」:三陸地方で強震。震害は軽 く、津波の被害が大きかった。伊達領内で死 1783、南部・津軽で人馬の死 3 千 余という。三陸沿岸で家屋の流出が多く、北海道東部でも溺死が多かった。1933 年の三陸地震津波に似ている。[4]
75	1614 11 26 (慶長 19 10 25) 従来、越後高田の地震とされていたもの。大地震の割に史料が少なく、震源 については検討すべきことが多い。京都で家屋・社寺などが倒壊し、死 2、傷 370 という。京都付近の地震とする説がある。
76	1615 6 26 (元和 1 6 1) 35.7°N 139.7°E M6 1/4~6 3/4 江戸:家屋が倒壊し、死傷多く、地割れを生じた。
77	1616 9 9 (元和 2 7 28) 38.1°N 142.0°E M7.0

番号	西暦(日本暦) 北緯 東経 M=マグニチュード/地域:(名称:)被害摘要
78	仙台:仙台城の石壁・櫓等破損。江戸で有感。津波を伴う? 1619 5 1 (元和 5 3 17) 32.5°N 130.6°E M6.0 肥後八代:麦島城はじめ公私の家屋が破壊した。
79	1625 1 21 (寛永 1 12 13) 安芸:広島で大震。城中の石垣・多門・堀などが崩壊した。島根で有感。
80	1625 7 21 (寛永 2 6 17) 32.8°N 130.6°E M5.0~6.0 熊本:地震のため熊本城の火薬庫爆発、天守付近の石壁の一部が崩れた。城中の石垣にも被害、死約50。
81	1627 10 22 (寛永 4 9 14) 36.6°N 138.2°E M6.0 松代:家屋倒壊80戸。死者があった。
82	1628 8 10 (寛永 5 7 11) M6.0 江戸・相模東部:江戸城の石垣所々崩れる。戸塚で道路破壊、八王子で有感。
83	1630 8 2 (寛永 7 6 24) 35 3/4°N 139 3/4°E M≈6 1/4 江戸:江戸城の石垣崩れ、堀も破損した。
84	1633 3 1 (寛永 10 1 21) 35.2°N 139.2°E M7.0 相模・駿河・伊豆:小田原城の矢倉・門堀・石壁ことごとく破壊。小田原で民家の倒壊多く、死150。箱根で山崩れ。熱海に津波が襲来した。[1]
85	1635 3 12 (寛永 12 1 23) 35 3/4°N 139 3/4°E M≈6.0 江戸:長屋の堀など破損。増上寺の石灯籠ほとんど倒れる。戸塚で有感。
86	1640 7 31 (寛永 17 6 13) 42.1°N 140.7°E 北海道噴火湾:駒ヶ岳噴火に伴い津波があり、死700余、昆布舟流出100余。 [2]
87	1640 11 23 (寛永 17 10 10) 36.3°N 136.2°E M6 1/4~6 3/4 加賀大聖寺:家屋の損壊多く、人畜の死傷も多かった。
88	1644 10 18 (正保 1 9 18) 39.4°N 140.0°E M6.5 羽後:本荘城廻大破し、屋倒れ、死者があった。市街で焼失が多かった。金浦村・石沢村で被害、院内村で地裂け、水が湧出した。
89	1646 6 9 (正保 3 4 26) 38.1°N 140.65°E M6.5~6.7 陸前・岩代・下野:仙台城・白石城で被害。会津で少々地割れ。日光東照宮で石垣など破損。江戸でもかなり強かった。
90	1646 12 7 (正保 3 11 1) 江戸:方々の石垣崩れ、家も損じ、地割れがあった。江戸城の石垣が所々破損した。
91	1647 6 16 (正保 4 5 14) M6.5 武藏・相模:江戸城や大名屋敷で被害、死者があった。小田原でも城の石垣が崩れるなどの被害、余震が多かった。
92	1648 6 13 (慶安 1 4 22) 35.2°N 139.2°E M≈7.0 相模・江戸:小田原城破損、領内で漁家が多くた。箱根で落石、死1。江戸で舟のごとく揺れ、瓦落ち、土蔵や練堀の半数が崩れ倒れた。小田原や江戸の大きな被害は疑問とする説がある。
93	1649 3 17 (慶安 2 2 5) 33.7°N 132.5°E M7.0 安芸・伊予:松山城・宇和島城の石垣や堀が崩れ、民家も破損。広島では侍屋敷・町屋少々潰れ、破損が多かった。

番号	西暦(日本暦) 北緯 東経 M=マグニチュード/地域:(名称:)被害摘要
94	1649 7 30 (慶安 2 6 21) 35.8°N 139.5°E M7.0 武藏・下野:川越で大地震、町屋700軒ほど大破。江戸城で石垣など破損。侍屋敷・長屋破損し、圧死多数。上野東照宮の大仏の頭落ちる。日光東照宮破損。余震日々40~50回。
95	1649 9 1 (慶安 2 7 25) 35.5°N 139.7°E M6.4 川崎・江戸:川崎駅の民屋140~150軒、寺7字が崩壊。近くの村で民屋が倒し、人畜の死傷多数。江戸でも被害。
96	1650 4 24 (慶安 3 3 24) M6.0~6.5 日光:江戸・日光で地震強く、日光東照宮で石垣など破損。
97	1659 4 21 (万治 2 2 30) 37.1°N 139.8°E M6 3/4~7.0 岩代・下野:猪苗代城の石垣2ヶ所崩れる。南会津の田鷲町で人家297軒など倒れ、死8。塩原温泉一村ほとんど土砂に埋まり、死多数。
98	1662 6 16 (寛文 2 5 1) 35.2°N 135.95°E M7 1/4~7.6 山城・大和・河内・和泉・摂津・丹後・若狭・近江・美濃・伊勢・駿河・三河・信濃:比良岳付近の被害が甚大。滋賀唐崎で田畠85町湖中に没し漁家1570。大溝で漁家1020余、死37。彦根で漁家1千、死30余。櫻村で死300、所川村で死260余。京都で町屋倒壊1千、死200余など。諸所の城破損。大きな内陸地震で、比良断層または花折断層の活動とする説がある。
99	1662 10 31 (寛文 2 9 20) 31.7°N 132.0°E M7 1/2~7 3/4 日向・大隅:日向灘沿岸に被害。城の破損、漁家多く、死者があった。山崩れ、津波を生じ、宮崎県沿岸7ヶ村周囲7里35町の地が陥没して海となった。日向灘の地震の中でも特に被害が大きかった。[2]
100	1664 1 4 (寛文 3 12 6) M5.9 山城:二条城や伏見の諸邸破損、洛中の築垣所々崩れる。吉田神社・下加茂社の石灯籠倒れる。余震が月末まで続いた。
101	1664 8 3 (寛文 4 6 12) 紀伊熊野:新宮丹鶴城の松の間崩れる。和歌山で有感。
102	1664 -- (寛文 4 --) 琉球:琉球の島嶼で地震、死1。近くの海底から噴火があったという。津波があった。[1]
103	1665 6 25 (寛文 5 5 12) M≈6.0 京都:二条城の石垣12~13間崩れ、二の丸殿舎など少々破損。
104	1666 2 1 (寛文 5 12 27) 37.1°N 138.2°E M≈6 3/4 越後西部:積雪14~15尺のときに地震。高田城破損、侍屋敷700余潰れ、民家の倒壊も多かった。夜火災、死約1500。
105	1667 -- (寛文 7 --) 琉球:宮古島で地震強く、洲鎌村の旱田1210坪約3尺沈下して水田となる。 [1]
106	1667 8 22 (寛文 7 7 3) 40.6°N 141.6°E M6.0~6.4 八戸:市中の建物の破損が夥しかった。津軽・盛岡で有感。
107	1668 6 14 (寛文 8 5 5) 越中:伏木・放生津・小杉で漁家があった。高岡城の橋潰れる。
108	1668 8 28 (寛文 8 7 21) M≈5.9

番号	西暦(日本暦) 北緯 東経 M=マグニチュード/地域:(名称:)被害摘要
109	仙台:仙台城の石垣崩れる。迫町で道割れ、家破損。江戸で有感。 1670 6 22 (寛文 10 5 5) 37.85°N 139.25°E M≈6 1/4 越後村上:上川4万石のうち農家503軒潰れ、死13。盛岡・江戸でも有感。
110	1671 -- (寛文 11 8 --) 花巻:町屋10軒ほど倒れ、庇の落下が多かった。
111	1674 4 15 (延宝 2 3 10) 40.6°N 141.6°E M≈6.0 八戸:城内・諸士屋敷・町屋に破損が多かった。
112	1676 7 12 (延宝 4 6 2) 34.5°N 131.8°E M≈6.5 石見:津和野城や侍屋敷の石垣などに被害。家屋倒壊133、死7。
113	1677 4 13 (延宝 5 3 12) 40.5°N 142.3°E M7.9 陸中・陸奥:「延宝の三陸沖地震」:八戸・盛岡在に家屋破損等の震害があった。 三陸一帯に津波があった。官古代官所管内で流失家屋35。余震が多かった。1968年十勝沖地震と似ている。[2]
114	1677 11 4 (延宝 5 10 9) 35.5°N 142.0°E M≈8.0 磐城・常陸・安房・上総・下総:上旬より地震が多かった。磐城から房総にかけて津波があり、小名浜・中之作・薄磯・四倉・江名・豊間などで死・不明130余、水戸領内で溺死36、房総で溺死246余、奥州岩沼領で死123。陸に近いM6級の地震とする説がある。[2]
115	1678 10 2 (延宝 6 8 17) 39.0°N 142.0°E M7.5 陸中・出羽:花巻で城の石垣崩れ、家屋も損壊、死1。白石城の石垣崩れる。秋田・米沢で家屋に被害。
116	1683 6 17 (天和 3 5 23) 36.7°N 139.6°E M6.0~6.5 日光:4月5日より地震多く、この日大地震。東照宮の石垣などに被害。北方の山が崩れた。
117	1683 6 18 (天和 3 5 24) 36.75°N 139.65°E M6.5~7.0 日光:卯刻から辰刻まで地震7回、巳ノ下刻に大地震。石垣・灯籠がほとんど倒れた。夜中までに地震約200回。江戸でも小被害。
118	1683 10 20 (天和 3 9 1) 36.9°N 139.7°E M7.0 下野・岩代:下野の三依川五十里村で山崩れ川を塞ぎ、湖を生じた。会津・日光でも山崩れ、石垣崩れなどの被害。1日、2日で地震760回余、1日から毎日まで1400回余。江戸で有感。
119	1685 -- (貞享 2 3 --) 三河:渥美郡で山崩れ、家屋倒壊し、人畜の死が多かった。疑わしきか?
120	1686 1 4 (貞享 2 12 10) 34.0°N 132.6°E M7.0~7.4 安芸・伊予:広島県中西部を中心に家屋などの被害が多く、死者があった。宮崎・萩・岩国・松山・三原などで被害。
121	1686 10 3 (貞享 3 8 16) 34.7°N 137.6°E M7.0 遠江・三河:遠江で新居の閑所など少々被害、死者があった。三河で田原城の矢倉など破損、死者があった。
122	1694 6 19 (元禄 7 5 27) 40.2°N 140.1°E M7.0 能代付近:42ヶ村に被害、特に能代は壊滅的打撃を受けた。全体で死394、家屋崩れ1273、焼失859など。秋田・弘前でも被害。岩木山で岩石崩れ、硫黄平に火を発した。

番号	西暦(日本暦) 北緯 東経 M=マグニチュード/地域:(名称:)被害摘要
123	1694 12 12 (元禄 7 10 26) 丹後:宮津で地割れて泥噴出。家屋破損、特に土蔵は大破損。
124	1696 6 1 (元禄 9 5 2) 宮古島:府庫・拝殿・寺院・仮屋などの石垣が崩壊した。
125	1697 11 25 (元禄 10 10 12) 35.4°N 139.6°E M≈6.5 相模・武藏:鎌倉で鶴岡八幡宮の鳥居倒れ、渕家があった。江戸城の石垣崩れる。日光で有感。
126	1698 10 24 (元禄 11 9 21) 33.1°N 131.5°E M≈6.0 豊後:大分城の石垣・壁など崩れる。岡城破損。佐賀で有感1日に6回。
127	1700 4 15 (元禄 13 2 26) 33.9°N 129.6°E M≈7.0 壱岐・対馬:24日より地震、26日の地震で壹岐の村里の石垣・墓所ごとく崩れ、屋宅大半崩れる。対馬で石垣が崩れるなどの被害。佐賀・平戸などで有感。
128	1703 12 31 (元禄 16 11 23) 33.25°N 131.35°E M6.5 豊後:府内(大分)山奥22ヶ村で渕家273、破損369、死1。油布院筋・大分領で農家580軒潰れる。豊後頭無村(現日出町豊岡)で人家崩れ、人馬の死があった。
129	1703 12 31 (元禄 16 11 23) 34.7°N 139.8°E M7.9~8.2 江戸・関東諸国:「元禄地震」:相模・武藏・上総・安房で震度大。特に小田原で被害大きく、城下は全滅、12ヶ所から出火、壊家8千以上、死2300以上。東海道は川崎から小田原まではほとんど全滅し、江戸・鎌倉などでも被害が大きかった。津波が犬吠崎から下田の沿岸を襲い、死数千。1923年関東地震に似た相模トラフ沿いの巨大地震と思われるが、地殻変動はより大きかった。[3]
130	1704 5 27 (宝永 1 4 24) 40.4°N 140.0°E M7.0 羽後・陸奥:能代の被害が最大。被害家屋1193のうち倒壊435、焼失758、死58。山崩れが多く、十二湖を生じた。岩館付近の海岸で最大190cm隆起。弘前でも城・民家などに被害があった。
131	1705 5 24 (宝永 2 閏 4 2) 33.0°N 131.2°E 阿蘇付近:阿蘇で坊の大破や崩れがあったという。岡城で被害があったという。
132	1706 1 19 (宝永 2 12 5) 38.6°N 139.9°E M5 1/4 羽前:湯殿山付近のきわめて局地的な小被害地震。家屋の破損や地割れがあった。
133	1706 10 21 (宝永 3 9 15) 35.6°N 139.8°E M≈5 1/4 江戸:江戸城や大名屋敷などで多少の被害。
134	1707 10 28 (宝永 4 10 4) 33.2°N 135.9°E M8.6 五畿・七道:「宝永地震」:わが国最大級の地震の一つ。全体で少なくとも死2万、渕家6万、流出家2万。震害は東海道・伊勢湾・紀伊半島で最もひどく、津波が紀伊半島から九州までの太平洋沿岸や瀬戸内海を襲った。津波の被害は土佐が最大。室戸・串本・御前崎で1~2m隆起し、高知市の東部の地約20km ² が最大2m沈下した。遠州灘冲および紀伊半島沖で二つの巨大地震が同時に起きたとも考えられる。[4]
135	1708 2 13 (宝永 5 1 22) 紀伊・伊勢・京都:地震い、汐溢れて山田吹上町に至る。宝永地震の余震か? [1]

番号	西暦(日本暦) 北緯 東経 M=マグニチュード/地域:(名称:)被害摘要
136	1710 9 15 (宝永 7 8 22) 37.0°N 141.5°E M6.5 磐城:平(いわき)で城などに被害。江戸で天水ひるがえるほど。
137	1710 10 3 (宝永 7 9 11) 35.5°N 133.7°E M≈6.5 伯耆・美作:河村・久米両郡(現鳥取県東伯郡)で被害最大。山崩れ人家を潰す。倉吉・八橋町・大山・鳥取で被害。死多数。
138	1711 3 19 (正徳 1 2 1) 35.2°N 133.8°E M≈6 1/4 因幡・伯耆:因伯両国で家380潰れ、死4。山崩れや田畠の被害があった。
139	1714 4 28 (正徳 4 3 15) 36.7°N 137.85°E M≈6 1/4 信濃北西部:大町組(大町以北の北安曇郡)で死56、全潰194、半潰141。善光寺でも被害があった。
140	1715 2 2 (正徳 4 12 28) 35.4°N 136.6°E M6.5~7.0 大垣・名古屋・福井:大垣城・名古屋城で石垣崩れる。福井で崩家があり、奈良・京都・伊賀上野・松本で有感。
141	1717 5 13 (享保 2 4 3) 38.5°N 142.5°E M7.5 仙台・花巻:仙台城の石垣崩れる。花巻で破損家屋多く、地割れや泥の噴出があった。津軽・角館・盛岡・江戸等で有感。
142	1718 8 22 (享保 3 7 26) 35.3°N 137.9°E M7.0 信濃・三河:伊那遠山谷で山崩れ、せき止められた遠山川が後に決壊し、死50余。飯田長久寺の唐門倒れた。日光・尾張・江戸でも有感。
143	1723 12 19 (享保 8 11 22) 32.9°N 130.6°E M6.5 肥後・豊後・筑後:肥後で倒家980、死2。飽田・山本・山鹿・玉名・菊池・合志各郡で強く、柳川辺でも強く感じた。
144	1725 5 29 (享保 10 4 18) 36.25°N 139.7°E (M6) 日光:東照宮の石矢来・石灯籠倒れる。江戸でもやや強く感じた。
145	1725 6 17 (享保 10 5 7) 36.4°N 136.4°E M≈6.0 加賀小松:城の石垣・蔵など少々破損。金沢で同日4~5回地震。
146	1725 8 14 (享保 10 7 7) 36.0°N 138.1°E M6.0~6.5 高遠・諏訪:高遠城の石垣・堀・土居夥しく崩れる。諏訪高島城の石垣・堀・門夥しく崩れ、城内外侍屋敷の破損87。郷村36ヶ村で倒家347など、死4。山崩れがあった。江戸・八王子・奈良で有感。
147	1729 3 8 (享保 14 2 9) 伊豆:大地割れ、川筋に水湧く。下田で家・土蔵傾倒。余震が20日すぎまで続いた。
148	1729 8 1 (享保 14 7 7) 37.4°N 137.1°E M6.6~7.0 能登:珠洲郡・鳳至郡で損・漁家791、死5、山崩れ1731ヶ所。輪島村で漁家28、能登半島先端で被害が大きかった。
---	1730 7 9 (享保 15 5 25) 陸前:前日のチリのバルバライソ沖の地震による津波。陸前沿岸で田畠を損じた。[1]
149	1731 10 7 (享保 16 9 7) 38.0°N 140.6°E M≈6.5 岩代:桑折で家屋300余崩れ、橋84落ちる。白石城で被害。蔵王の高湯や仙台でも被害が多かったという。
150	1731 11 13 (享保 16 10 14)

番号	西暦(日本暦) 北緯 東経 M=マグニチュード/地域:(名称:)被害摘要
151	近江八幡・刈谷:近江八幡で背屋橋の石垣破損し、刈谷で本城厩前の塀倒れる。 1733 9 18 (享保 18 8 11) 36.6°E M6.6
152	安芸:奥郡に被害、因幡でも地大いに震う。京都・池田・讃岐で有感。 1735 5 6 (享保 20 4 14) 日光・守山:東照宮で石垣少々崩れる。守山(現郡山市内)で稗蔵の壁所々割れる。江戸で有感。從来、3月14日とされていたもの。
153	1736 4 30 (元文 1 3 20) M≈6.0 仙台:仙台で城の石垣や櫓橋など破損。余目・江戸で有感。
154	1738 1 3 (元文 2 1 13) 37.0°N 138.7°E M≈5 1/2 中魚沼郡:蘆ヶ崎村(現津南町)付近で14日朝まで80回余、翌年に及ぶ。蔵の壁損じ、釜潰れる。信州青倉村(現栄村)で家蔵破損。
155	1739 8 16 (元文 4 7 12) 陸奥:南部高森(場所不明)で特に強く、青森で蔵潰れる。八戸で諸士町家ともに被害が多かった。
156	1741 8 29 (寛保 1 7 19) 41.6°N 139.4°E 渡島西岸・津軽・佐渡:渡島大島この月の上旬より活動、13日に噴火した。 19日早朝に津波、北海道で死1467、流出家屋729、船1521破壊。津軽で田畠の損も多く、流失漁家約100、死37。佐渡・能登・若狭にも津波。[3]
157	1746 5 14 (延享 3 3 24) 江戸・日光:日光東照宮の石矢来約20間倒れる。江戸・八王子・京都・津軽で有感。
158	1749 5 25 (寛延 2 4 10) 33.2°N 132.6°E M6 1/4 宇和島・大分:宇和島城で所々破損、矢来大破。大分で千石橋破損。土佐・広島・伊賀・延岡で強く感じた。
159	1751 3 26 (宝暦 1 2 29) 35.0°N 135.8°E M5.5~6.0 京都:諸社寺の築地や町屋など破損。越中で強く感じ、鳥取・金沢・大阪・池田で有感。
160	1751 5 21 (宝暦 1 4 26) 37.1°N 138.2°E M7.0~7.4 越後・越中:高田城で所々破損、町方3ヶ所から出火した。鉢崎・糸魚川間の谷で山崩れ多く、圧死多数。富山・金沢でも強く感じ、日光で有感。全体で、死1500以上。余震が多かった。
161	1755 3 29 (宝暦 5 2 17) 陸奥八戸:殿中ならびに外通りに被害。津軽・盛岡で有感。
162	1755 4 21 (宝暦 5 3 10) 36.75°N 139.6°E 日光:東照宮の石矢来・石垣などに被害。江戸・八戸で被害。
163	1756 2 20 (宝暦 6 1 21) 35.7°N 140.9°E M5.5~6.0 銚子:蔵にいたみがあった。酒・醤油の桶を振り返し、石塔倒れる。江戸・八王子・日光で有感。
164	1760 5 15 (宝暦 10 4 1) 琉球:城墻57ヶ所崩れる。余震があった。
165	1762 10 18 (宝暦 12 9 2) 土佐:高岡郡で瓦落ち、山崩れる。16日まで少々ずつ地震。岩国・宇和島・筑後で有感。

番号	西暦(日本暦) 北緯 東経 M=マグニチュード/地域:(名称:)被害摘要
166	1762 10 31 (宝暦 12 9 15) 38.1°N 138.7°E M=7.0 佐渡:石垣・家屋が破損、銀山道が崩れ、死者があった。鵜島村で津波により26戸流出、新潟で地割れを生じ、砂と水を噴出。酒田・羽前南村山郡・日光で有感。[1]
167	1763 1 29 (宝暦 12 12 16) 41.0°N 142.3°E M7.4 陸奥八戸:11月初めより地震があり、この日大地震。寺院・民家が破損した。平館で家潰1,死3。函館でも強く感じた。津波があり、余震が多かった。1968年十勝沖地震と似ているので、もっと沖の大きな地震かもしれない。[1]
168	1763 3 11 (宝暦 13 1 27) 41.0°N 142.0°E M7.3 陸奥八戸:『宝暦の八戸沖地震』:前年12月の地震以来震動とまらず、この日強震。建物の被害が多かった。[0]
169	1763 3 15 (宝暦 13 2 1) 41.0°N 142.0°E M7.0 陸奥八戸:城の堀倒れ、御朱印蔵の屋根破損。
170	1766 3 8 (明和 3 1 28) 40.7°N 140.5°E M7 ¼ 津軽:弘前から津軽半島にかけて被害が大きかった。弘前城破損、各地に地割れ。津軽藩の被害(社寺含まず)は、漁家5千余、焼失200余、圧死約1千、焼死約300。余震が年末まで続いた。
171	1767 5 4 (明和 4 4 7) 陸中:鬼柳(現北上市)で漁家1、焼失20余。津軽・八戸・盛岡・花巻・羽前南村山郡・江戸・八王子で有感。
172	1767 10 22 (明和 4 9 30) 35.7°N 139.8°E M=6.0 江戸:瓦が落ち、14~15軒潰れ、所々破損があった。
173	1768 7 22 (明和 5 6 9) 26.2°N 127.5°E 琉球:王城などの石垣が崩れた。津波が来て、慶良間島で田園と民家9戸を損じた。[1]
174	1768 9 8 (明和 5 7 28) 陸奥八戸:29日にも2回地震。家屋・堀などの被害が少なくなかった。和賀郡沢内で震動が強かった。
175	1769 7 12 (明和 6 6 9) 40.6°N 141.6°E 八戸:御殿通り・外側通りで所々破損、南宗寺で御靈屋など破損。大橋落ちる。
176	1769 8 29 (明和 6 7 28) 33.0°N 132.1°E M7 ¾ 日向・豊後・肥後:延岡城・大分城で被害多く、寺社・町屋の破損が多かった。熊本領内でも被害が多く、宇和島で強く感じた。津波があった。[1]
177	1771 4 24 (明和 8 3 10) 24.0°N 124.3°E M7.4 八重山・宮古両群島:『八重山地震津波』:震害はなかったようである。津波による被害が大きく、石垣島が特にひどかった。全体で家屋流失2千余、溺死約1万2千。[4]
178	1772 6 3 (安永 1 5 3) 39.35°N 141.9°E M6 ¾ 陸前・陸中:遠野・宮古・大槌・沢内で落石や山崩れ、死12。花巻城で所々破損、地割れあり。盛岡で家屋破損。江戸など有感。1987年1月9日の地震に似ており、海岸近くのやや深い地震の可能性がある。
179	1778 2 14 (安永 7 1 18) 34.6°N 132.0°E M=6.5 石見:那賀郡波佐村で石垣崩れ、都茂村で落石。安芸より備前まで強く震い、

番号	西暦(日本暦) 北緯 東経 M=マグニチュード/地域:(名称:)被害摘要
180	筑前で有感。 1780 7 20 (安永 9 6 19) 38.9°N 139.9°E M=6.5 酒田:土蔵倒れかかって小家1軒潰れ、死2。亀ヶ崎城内で被害。余目・金浦でも小被害。
181	1782 8 23 (天明 2 7 15) 35.4°N 139.1°E M=7.0 相模・武藏・甲斐:月はじめより前震があり、15日に2度大震。小田原城破損、人家約800破損。箱根・大山・富士山で山崩れ。江戸でも漁家や死者があった。熱海で津波があったらしい。[1]
182	1786 3 23 (天明 6 2 24) 35.2°N 139.1°E M5~5 ½ 箱根:23~24日で地震100回余。大石落ち、人家を多く破った。関所の石垣など破損。
183	1789 5 11 (寛政 1 4 17) 33.7°N 134.3°E M7.0 阿波:阿波富岡町で文珠院や町屋の土蔵に被害、山崩れがあった。南部の沿岸地方、土佐室津に被害。広島・鳥取・岡山・山口で有感。震央は紀伊水道の可能性もある。
184	1791 1 1 (寛政 2 11 27) 35.8°N 139.6°E M6.0~6.5 川越・蕨:蕨で堂塔が転倒し、土蔵なども破損。川越で喜多院の本社屋根・瑞籬など破損。
185	1791 7 23 (寛政 3 6 23) 36.2°N 138.0°E M=6 ¾ 松本:松本城で堀など崩れる。人家・土蔵も多く崩れた。27日暮までに地震79回。高山・甲府で有感。
186	1792 5 21 (寛政 4 4 1) 32.8°N 130.3°E M6.4 雲仙岳:前年10月から始まった地震が11月10日頃から強くなり、山崩れなどでたびたび被害があった。4月1日に大地震2回、前山(天狗山)の東部がくずれ、崩土約0.34 km³が島原海に入り津波を生じた。対岸の肥後でも被害が多く、津波による死者は全体で約1万5千、「島原大変肥後迷惑」と呼ばれた。[3]
187	1792 6 13 (寛政 4 4 24) 43 ¾°N 140.0°E M=7.1 後志:津波があった。忍路で港頭の岸壁が崩れ、海岸に引き上げていた夷船漂流、出漁中の夷人5人溺死。美國でも溺死若干。[2]
188	1793 1 13 (寛政 4 12 2) 34.1°N 131.5°E M6 ¼~6 ½ 長門・周防:防府で人家の損壊が多かったという。
189	1793 2 8 (寛政 4 12 28) 40.85°N 139.95°E M6.9~7.1 西津軽:鶴ヶ沢・深浦で激しく、全体で漁家154、死12など。大戸瀬を中心約12 kmの沿岸が最高3.5 m隆起した。小津波があり、余震が続いた。[1]
190	1793 2 17 (寛政 5 1 7) 38.3°N 144.0°E M8.2 陸前・陸中・磐城:仙台領内で家屋損壊1千余、死12。沿岸に津波が来て、全体で家屋流失1730余、船流破33、死44以上。余震が多かった。宮城県沖の巨大地震と考えられる。[2]
191	1794 11 25 (寛政 6 11 3) 江戸:鳥取藩上屋敷・幕府書物方番所で被害。日光・甲府・矢祭・花巻で有感。
192	1796 1 3 (寛政 7 11 24) 35.7°N 134.3°E M5~6 因幡:岩美町で倉の壁が落ち、石塔倒れ、地下水の異常があった。余震が翌年正月まであった。

番号	西暦(日本暦) 北緯 東経 M=マグニチュード/地域:(名称:)被害摘要
193	1799 6 29 (寛政 11 5 26) 36.6°N 136.7°E M6.0 加賀:上下動が激しく、屋根石が1尺も飛び上がったといふ。金沢城で石垣破損、城下で漁家 4169、能美・石川・河北郡で損家 1003、漁家 964。全体で死 21。
194	1801 5 27 (享和 1 4 15) 35.3°N 140.1°E 上総:久留里城の堀など破損、民家の潰れるもの多かった。江戸で有感。
195	1802 11 18 (享和 2 10 23) 35.2°N 136.5°E M6.5~7.0 畿内・名古屋:奈良春日の石灯籠かなり倒れ、名古屋で本町御門西の土居の松倒れ、高壁崩れる。彦根・京都で有感。やや深い地震か?
196	1802 12 9 (享和 2 11 15) 37.8°N 138.35°E M6.5~7.0 佐渡:已刻の地震で微小被害、未刻の地震は大きく、佐渡3郡全体で焼失 328、漁家 732、死 19。島の西南海岸が最大 2 m 強隆起した。鶴岡で強く感じ、米沢・江戸・日光・高山・秋田・弘前で有感。
197	1804 7 10 (文化 1 6 4) 39.05°N 139.95°E M7.0 羽前・羽後:「象潟地震」:5月より付近で鳴動があった。被害は全体で漁家 5 千以上、死 300 以上。象潟湖が隆起して乾陸あるいは沼となった。余震が多かった。象潟・酒田などに津波の記事がある。
198	1810 9 25 (文化 7 8 27) 39.9°N 139.9°E M6.5 羽後:男鹿半島の東半分 5 月頃より鳴動し、7 月中旬から地震が頻発、27 日に大地震。寒風山を中心いて被害があり、全漁 1003、死 57。秋田で強く感じ、角館・大館・鶴ヶ沢・弘前・鶴岡で有感。
199	1811 1 27 (文化 8 1 3) 三宅島:噴火活動による地震。山崩れ・地割れを生じた。
200	1812 4 21 (文化 9 3 10) 33.5°N 133.5°E 土佐:高知で土蔵壁落ち、瓦落下、堀の損所があった。中村の方が強かったともいう。
201	1812 12 7 (文化 9 11 4) 35.45°N 139.65°E M6 ¼ 武藏・相模:江戸で小被害があった。最戸村(現横浜市港南区)で漁家 22。その他神奈川・川崎・保土ヶ谷などに漁家や死者があった。
202	1815 3 1 (文化 12 1 21) 36.4°N 136.5°E M≈6.0 加賀小松:小松城の破損多く、岐阜県白鳥町の悲願寺で香炉が落ちた。金沢で強かった。
203	1817 12 12 (文化 14 11 5) 35.20°N 139.05°E M≈6.0 箱根:箱根で落石、江戸で幕府書物方の蔵に小被害。秩父・甲府・八王子で有感。
204	1819 8 2 (文政 2 6 12) 35.2°N 136.3°E M7 ¼ 伊勢・美濃・近江:近江八幡で漁家 82、死 5。木曾川下流では香取(多度町)で 40 軒全滅、金廻では海寿寺潰れ庄死 70。名古屋・犬山・四日市・京都などのほか、金沢・敦賀・出石・大和郡山などでも被害。
205	1821 9 12 (文政 4 8 16) 津軽・青森・八戸:青森で小店の屋根落ち、子供 1 人死亡。八戸で城などに被害。
206	1821 12 13 (文政 4 11 19) 37.45°N 139.6°E M5.5~6.0 岩代:大沼郡大石組の狭い範囲に強震。130 軒壊れ、破損 300 余軒、死若干。上下動が強く、山崩れがあった。翌年 1 月 4 日、さらに強い地震があった。
207	1823 9 29 (文政 6 8 25) 40.0°N 141.1°E M5 ¾~6

番号	西暦(日本暦) 北緯 東経 M=マグニチュード/地域:(名称:)被害摘要
208	陸中岩手山:山崩れあり、西根八ヶ村に被害、漁家 105 など。岩手山の北 30 km にある七時雨山も崩れ、死 69、不明 4。
209	1826 8 28 (文政 9 7 25) 36.2°N 137.25°E M≈6.0 飛騨大野郡:地裂け、石垣崩れる。土蔵の壁土落ち、石塔・石灯籠が倒れた。
210	1828 5 26 (文政 11 4 13) 32.6°N 129.9°E M≈6.0 長崎:出島の周壁が数ヶ所潰裂。天草で激しかったという。天草の海中で噴火に似た現象があったという。
211	1828 12 18 (文政 11 11 12) 37.6°N 138.9°E M6.9 越後:激震地域は信濃川流域の平地。三条・見付・今町・与板などで被害が大きかった。武者によると全体で全漁 9808、焼失 1204、死 1443 であるが、実際はもっと多かったらしい。地割れから水や砂の噴出がみられたり、流砂現象がみられた。
212	1830 8 19 (天保 1 7 2) 35.1°N 135.6°E M6.5 京都および隣国:洛中洛外の土蔵はほとんど被害を受けたが、民家の倒漁はほとんどなかった。御所・二条城などで被害。京都での死 280。上下動が強く、余震が非常に多かった。
213	1831 11 14 (天保 2 10 11) 33.2°N 130.3°E M≈6.1 肥前:佐賀城の石垣崩れ、侍屋敷・町郷に破損多く、漁家もあった。
214	1832 3 15 (天保 3 2 13) 40.7°N 141.6°E M≈6 ¼ 八戸:土蔵の破損が多かった。南宗寺・本寿寺の石碑所々痛む。
215	1833 5 27 (天保 4 4 9) 35.5°N 136.6°E M≈6 ¼ 美濃西部:大垣北方の村々で山崩れ多く、死者 11 という。余震が多く、8 月まで続く。震源は根尾谷断層に近い。
216	1833 12 7 (天保 4 10 26) 38.9°N 139.25°E M7 ½ 羽前・羽後・越後・佐渡:庄内地方で特に被害が大きく、漁家 475、死 42。津波が本庄から新潟に至る海岸と佐渡を襲い、能登で大破流出家約 345、死約 100。[2]
217	1834 2 9 (天保 5 1 1) 43.3°N 141.4°E M≈6.4 石狩:地割れ、泥噴出。アイヌの家 23 潰れる。その他、会所などに被害。
218	1835 3 12 (天保 6 2 14) 35.1°N 132.6°E M≈5 ½ 石見:島根県高畠村で石地蔵・石塔・墓石などが倒れ、蔵の壁が破れ、石垣が崩れた。
219	1836 3 31 (天保 7 2 15) 34.4°N 139.2°E M5~6 伊豆新島:神社・寺の石垣崩れる。江戸で有感。2月末まで地震続く。
220	1839 5 1 (天保 10 3 18) M≈7.0 釧路・厚岸:国泰寺門前の石灯籠大破、戸障子破損。津軽で強く感じた。
221	1841 4 22 (天保 12 3 2) 35.0°N 138.5°E M≈6 ¼ 駿河:駿府城の石垣崩れ、久能山東照宮の堂・門など破損。江尻・清水辺で家や蔵の壁が落ち、地裂け、水吹き出す。三保の松原の砂地が 2 千坪ほど沈下した。
222	1841 11 3 (天保 12 9 20) 33.2°N 132.4°E M≈6.0

番号	西暦(日本暦) 北緯 東経 M=マグニチュード/地域:(名称:)被害摘要
223	宇和島: 宇和島城の塀・壁など破損。四国・中国の西部と筑後で有感。 1842 4 17 (天保 13 3 7) 琉球: 宮古島などで5日頃から地震、7日の地震で石垣が多く崩れた。14日まで数十回の地震があった。
224	1843 3 9 (天保 14 2 9) 35.35°N 139.1°E M6.5 足柄・御殿場: 足柄萱沼村で石垣・堤の崩れ多く、御殿場の近くや津久井でも被害があった。
225	1843 4 25 (天保 14 3 26) 42.0°N 146.0°E M≈7.5 釧路・根室: 厚岸国泰寺で被害があった。津波があり、全体で死46。家屋破壊 76. 八戸にも津波。松前・津軽で強く感じ、江戸でも有感。[2]
226	1844 8 8 (弘化 1 6 25) 33.0°N 131.3°E 肥後北部: 28日まで地震が多く、久住北里で特に強かった。杖立村で落石により百姓屋崩れる。
227	1847 2 15 (弘化 4 1 1) 越後高田: 諸所破損、長屋も破損。
228	1847 5 8 (弘化 4 3 24) 36.7°N 138.2°E M7.4 信濃北部および越後西部: 「善光寺地震」: 被害範囲は高田から松本に至る地域で、特に水内・更級両郡の被害が最大だった。松代領で渕家 9550, 死 2695, 飯山領で渕家 1977, 死 586, 善光寺領で渕家 2285, 死 2486 など。全国からの善光寺の参詣者7千~8千のうち、生き残ったものの約1割という。山地で山崩れが多く、松代領では4万ヶ所以上。虚空蔵山が崩れて犀川をせき止め、上流は湖となったが、4月13日に決壊して流出家屋 810, 流死 100 余。
229	1847 5 13 (弘化 4 3 29) 37.2°N 138.3°E M6 ½ 越後頸城郡: 善光寺地震の被害と区別できないところが多い。渕家・大破ならびに死傷があった。地割れを生じ、泥を噴出し、田畠が埋没したところもあった。
230	1848 1 10 (弘化 4 12 5) 33.2°N 130.4°E M5.9 筑後: 柳川で家屋の倒壊があった。
231	1848 1 13 (弘化 4 12 8) 40.7°N 140.6°E M6.0 津軽: 弘前の城内・城下で被害。黒石・猿賀(弘前の北東)辺で特に強く、渕家があつたらしい。
232	1848 1 25 (弘化 4 12 20) 32.85°N 130.65°E 熊本: 熊本城内で石垣を損じ、座敷などの壁が落ちた。
233	1853 1 26 (嘉永 5 12 17) 36.6°N 138.1°E M6.5 信濃北部: 善光寺で被害。長野市中で下屋の破損があった。松代領で渕家 23.
234	1853 3 11 (嘉永 6 2 2) 35.3°N 139.15°E M6.7 小田原付近: 小田原で被害が大きく、城内で潰れや大破があった。小田原領で渕家 1千余、死 24. 山崩れが多かった。
235	1854 7 9 (安政 1 6 15) 34.75°N 136.1°E M7 ¼ 伊賀・伊勢・大和および隣国: 12日頃から前震があった。上野付近で渕家 2千余、死約 600. 奈良で渕家 700 以上、死約 300 など、全体で死者は 1500 を越える。上野の北方で西南西-東北東方向の断層を生じ、南側の 1 km の地域が最大 1.5 m 相対的に沈下した。木津川断層の活動であろう。
236	1854 8 28 (安政 1 閏 7 5) 40.6°N 141.6°E M6.5

番号	西暦(日本暦) 北緯 東経 M=マグニチュード/地域:(名称:)被害摘要
237	陸奥: 三戸・八戸で被害。地割れがあった。 1854 12 23 (安政 1 11 4) 34.0°N 137.8°E M8.4 東海・東山・南海諸道: 「安政東海地震」: 被害は関東から近畿に及び、特に沼津から伊勢湾にかけての海岸がひどかった。津波が房総から土佐までの沿岸を襲い、被害をさらに大きくした。この地震による居宅の潰・焼失は約 3 万軒、死者は 2 千~3 千人と思われる。沿岸では著しい地殻変動が認められた。地殻変動や津波の解析から、震源域が駿河湾深くまで入り込んでいた可能性が指摘されており、すでに 100 年以上経過していることから、次の東海地震の発生が心配されている。[3]
238	1854 12 24 (安政 1 11 5) 33.0°N 135.0°E M8.4 畿内・東海・東山・北陸・南海・山陰・山陽道: 「安政南海地震」: 東海地震の 32 時間後に発生、近畿付近では二つの地震の被害をはっきりとは区別できない。被害地域は中部から九州に及ぶ。津波が大きく、波高は串本で 15 m、久礼で 16 m、種崎で 11 m など。地震と津波の被害の区別が難しい。死者数千。室戸・紀伊半島は南上がりの傾動を示し、室戸・串本で約 1 m 隆起、甲浦・加太で約 1 m 沈下した。[4]
239	1854 12 26 (安政 1 11 7) 33 ¼°N 132.0°E M7.3~7.5 伊予西部・豊後: 南海地震の被害と区別が難しい。伊予大洲・吉田で渕家があった。鶴崎で倒れ屋敷 100、土佐でも強く感じた。
240	1855 3 15 (安政 2 1 27) 遠江・駿河: 大井川の堤搖れ込み、焼津で古い割れ目から水が噴出。
241	1855 3 18 (安政 2 2 1) 36.25°N 136.9°E M6 ¾ 飛驒白川・金沢: 野谷村で寺・民家に破損があった。保木脇村で民家 2 軒が山抜けのため潰れ、死 12. 金沢城で石垣など破損。
242	1855 8 16 (安政 2 7 4) 米子: 城内で所々崩れ、地割れもあった。
243	1855 9 13 (安政 2 8 3) 38.1°N 142.0°E M7.3 陸前: 仙台で屋敷の石垣、堂寺の石塔・灯籠崩れる。山形県・岩手県南部・新潟県分水嶺・常陸太田で有感。
244	1855 11 7 (安政 2 9 28) 34.5°N 137.75°E M7.0~7.5 遠州灘: 前年の東海地震の最大余震。掛塚・下前野・袋井・掛川辺がひどく、ほとんど全滅。死者があった。津波があった。
245	1855 11 11 (安政 2 10 2) 35.65°N 139.8°E M7.0~7.1 江戸および付近: 「江戸地震」: 下町で特に被害が大きかった。地震後 30 余ヶ所から出火したが、風が静かで焼失面積は 2.2 km² にとどまった。江戸町方の被害は、潰れ焼失 1 万 4 千余軒、死 4 千余。武家方には死約 2600 等の被害があり、合わせて死は計 1 万とも。瓦版が多数発行された。
246	1856 8 23 (安政 3 7 23) 41.0°N 142.3°E M7.5 日高・胆振・渡島・津軽・南部: 「安政の八戸沖地震」: 震害は少なかったが、津波が三陸及び北海道の南岸を襲った。南部藩で流失 93、渕 106、溺死 26、八戸藩でも死 3 など。余震が多かった。1968 年十勝沖地震に津波の様子がよく似ており、もう少し海溝寄りの地震かもしれない。[2]
247	1856 11 4 (安政 3 10 7) 35.7°N 139.5°E M6.0~6.5

番号	西暦(日本暦) 北緯 東経 M=マグニチュード/地域:(名称:)被害摘要
	江戸・所沢:江戸で壁の剥落や積瓦の落下があり、傷 23。多摩川で家屋倒壊 15 という。
248	1857 7 8 (安政 4 閏 5 17) 34.4°N 131.4°E M≈6.0 萩:城内で石垣などに小被害。市中でも小被害があった。
249	1857 7 14 (安政 4 閏 5 23) 34.8°N 138.2°E M6 ¼ 駿河:田中城内で被害。藤枝・静岡で強くゆれ、相良で人家が倒れたといふ。
250	1857 10 12 (安政 4 8 25) 34.0°N 132.75°E M7 ¼ 伊予・安芸:今治で城内破損、郷町で漬家 3, 死 1。宇和島・松山・広島などで被害。郡中で死 4。
251	1858 4 9 (安政 5 2 26) 36.4°N 137.2°E M7.0~7.1 飛騨・越中・加賀・越前:『飛越地震』:飛騨北部・越中で被害が大きく、飛騨で漬家 319, 死 203, 山崩れも多く、常願寺川の上流が堰止められ、後に決壊して流出および漬家 1600 余、溺死 140 の被害を出した。跡津川断層の運動(右横ずれ)によると考えられる。
252	1858 4 9 (安政 5 2 26) 丹後宮津:地割れを生じ、家屋が大破した。
253	1858 4 23 (安政 5 3 10) 36.6°N 137.9°E M5.7 信濃北西部:大町組で家・蔵が潰れ、山崩れがあった。この地震が引金で、2月 26 日の地震で堰止められたところが崩れたと考えられる。
254	1858 7 8 (安政 5 5 28) 40.7°N 142.0°E M7.3 八戸・三戸:八戸・三戸で土蔵・堤水門・橋など破損。青森・弘前・陸奥・田名部・慙ヶ沢・秋田で強く感じた。
255	1858 8 24 (安政 5 7 16) 紀伊:田辺で瓦が落ち、壁が崩れた家があった。
256	1858 9 29 (安政 5 8 23) 40.9°N 140.8°E M≈6.0 青森:安方町で米蔵潰れる。狩場沢村(現平内町)で道路に亀裂があった。
257	1859 1 5 (安政 5 12 2) 34.8°N 131.9°E M6.2 石見:島根県一帯で強く、波佐村で山崩れがあった。周布村・美濃村・下道川村などで被害。家潰 56。
258	1859 1 11 (安政 5 12 8) 35.9°N 139.7°E M≈6.0 岩槻:城の本丸櫓・多門その他破損。江戸・佐野・鹿沼で有感。
259	1859 10 4 (安政 6 9 9) 34.5°N 132.0°E M6.0~6.5 石見:島根県那賀郡で強く、周布村でも漬家や地割れがあった。広島城内でも被害があった。
260	1861 10 21 (文久 1 9 18) 38.5°N 142.0°E M7.3 陸前・磐城:陸前の遠田・志田・登米・桃生等の各郡で特に被害が多く、漬家・死傷があった。江戸・新潟県分水町・長野・長万部・津軽まで有感。
261	1865 2 24 (元治 2 1 29) M≈6 ¼ 播磨・丹波:古川上流の杉原谷で家屋が多く破壊したといふ。
262	1866 11 24 (慶応 2 10 18) 銚子:銚子市後飯町の浅間社の石の鳥居倒れる。日光・相馬・成田・江戸・千葉で有感。
263	1870 5 12 (明治 3 4 12) 35.25°N 139.1°E M6.0~6.5

番号	西暦(日本暦) 北緯 東経 M=マグニチュード/地域:(名称:)被害摘要
	小田原:小田原城内の所々で壁などが破損した。町田・江戸・塩山・馬籠・分水町で有感。
264	1872 3 14 (明治 5 2 6) 35.15°N 132.1°E M7.1 石見・出雲:『浜田地震』:1週間ほど前から鳴動、当日には前震もあった。全体で全潰約 5 千、死約 550、特に石見東部で被害が多かった。海岸沿いに数尺の隆起・沈降がみられ、小津波があった。[0]
---	1877 5 10 (明治 10) 太平洋沿岸:チリのイキケ沖の地震による津波。波高は釜石で 3 m など。函館などで被害。房総半島で死者があった。
265	1880 2 22 (明治 13) 35.4°N 139.75°E M5.5~6.0 横浜:横浜で煙突の破損が多く、家屋の壁が落ちた。東京の被害は軽かった。この地震を機として日本地震学会が生まれた。
266	1881 10 25 (明治 14) 43.3°N 147.3°E M≈7.0 北海道:国後島泊淵で板蔵など倒れ、または大破した。津軽でも強く感じた。
267	1882 6 24 (明治 15) 高知市付近:市中で壁が落ち、板扉が倒れ、石灯籠の頭が落ちるなどの被害があった。
268	1884 10 15 (明治 17) 35.7°N 139.75°E 東京付近:多数の煙突が倒れ、煉瓦作りの壁に亀裂が入った。柱時計の 70~80 %が止まった。
269	1886 7 23 (明治 19) 37.1°N 138.5°E M5.3 [2] 新潟県南部:家屋倒壊、道路・石垣破損、山崩れなどの小被害。上高井地方で前震があった。
270	1889 7 28 (明治 22) 32.8°N 130.7°E M6.3 [4] 熊本県西部:熊本市を中心半径約 20 km の範囲に被害があり、県全体で全潰 239、死 20。橋の落下や破損が多かった。
271	1890 1 7 (明治 23) 36.5°N 138.0°E M6.2 [2] 長野県北部:東筑摩・北安曇・更科・上水内の各郡で家屋の小破、山崩れ、道路破損などがあった。死 1。
272	1891 10 28 (明治 24) 35.6°N 136.6°E M8.0 [6] 岐阜県西部:『渡尾地震』:仙台以南の全国で地震を感じた。わが国の内陸地震としては最大のもの。建物全潰 14 万余、半潰 8 万余、死 7273、山崩れ 1 万余。根尾谷を通る大断層を生じ、水鳥で上下に 6 m、水平に 2 m ずれた。1892 年 1 月 3 日、9 月 7 日、94 年 1 月 10 日の余震でも家屋破損などの被害があった。
273	1892 12 9 (明治 25) 37.1°N 136.7°E M6.4 [3] 能登半島西岸:家屋・土蔵の破損があった。11 日にも同程度の地震があり、羽咋郡で全潰 2、死 1。[0]
274	1893 6 4 (明治 26) 43 ½°N 148°E M7 ¾ [1] 色丹島沖:択捉島で震動が強く、岩石の崩壊があった。津波は色丹島で 2.5 m など。[1]
275	1893 9 7 (明治 26) 31.4°N 130.5°E M5.3 [3] 鹿児島県南部:知覧村付近で強く、家屋・土蔵・石垣・堤防など破損。近くの村々でも被害。倒家 2。

番号	西暦(日本暦) 北緯 東経 M=マグニチュード/地域:(名称:)被害摘要
276	1894 3 22 (明治 27) 42°12'N 146°E M7.9 [3] 根室沖: 根室・厚岸で家屋・土蔵に被害。死1, 家屋全壊12, 津波は宮古 4.0 m, 大船渡 1.5 m など。[2]
277	1894 6 20 (明治 27) 35.7°N 139.8°E M7.0 [4] 東京都東部:『東京地震』: 青森から中国・四国地方まで地震を感じた。東京・横浜の被害が大きかった。神田・本所・深川で全半壊多く、東京で死24, 川崎・横浜で死7, 鎌倉・浦和方面にも被害があった。
278	1894 10 22 (明治 27) 38.9°N 139.9°E M7.0 [5] 山形県北西部:『庄内地震』: 被害は主として庄内平野に集中した。山形県下で全壊 3858, 半壊 2397, 全焼 2148, 死 726。
279	1895 1 18 (明治 28) 36.1°N 140.4°E M7.2 [3] 茨城県南部: 北海道・四国・中国の一部まで地震を感じた。被害範囲は関東東半分。全壊 53 (家屋 43, 土蔵 10), 死 6。
280	1896 4 2 (明治 29) 37.5°N 137.3°E M5.7 [2] 石川県北岸: 島村で土蔵倒壊2, 家屋破壊 15, 積剛崎燈台破損。
281	1896 6 15 (明治 29) 39.5°N 144.0°E M8.2 [7] 三陸沖:『三陸沖地震』: 震害はない。津波が北海道より牡鹿半島にいたる海岸に襲来し、死者総数は 21959 (青森 343, 宮城 3452, 北海道, 岩手 181586)。家屋流失全半壊 8~9 千, 船の被害約 7 千。波高は、吉浜 24.4 m, 練里 38.2 m, 田老 14.6 m など。津波はハワイやカリフォルニアに達した。M は津波を考慮したもの。[4]
282	1896 8 31 (明治 29) 39.5°N 140.7°E M7.2 [5] 秋田県東部:『陸羽地震』: 秋田県の仙北郡・平鹿郡, 岩手県の西和賀郡・稗貫郡で被害が大きく、両県で全壊 5792, 死 209, 川舟断層・千屋断層を生じた。
283	1897 2 20 (明治 30) 38.1°N 141.9°E M7.4 [2] 宮城県沖:『宮城県沖地震』: 岩手・山形・宮城・福島で小規模の被害。石巻で住家全倒1, 一ノ関で家屋大破 60 など。[0]
284	1897 8 5 (明治 30) 38.3°N 143.3°E M7.7 [2] 宮城県沖: 津波により三陸沿岸に小被害。津波の高さは盛で 3 m, 釜石で 1.2 m。[1]
285	1898 4 3 (明治 31) 34.6°N 131.2°E M6.2 [2] 山口県北方沖: 見島西部で強く、神社仏閣の損傷・倒壊, 石垣の崩壊があった。
286	1898 4 23 (明治 31) 38.6°N 142.0°E M7.2 [2] 宮城県沖: 岩手・宮城・福島・青森の各県で小被害。花巻で土蔵全壊 1, 小津波があった。[-1]
287	1899 3 7 (明治 32) 34.1°N 136.1°E M7.0 [3] 三重県南部: 奈良県吉野郡・三重県南牟婁郡で被害が大きく、木ノ本・尾鷲で死7, 全壊 35, 山崩れ無数。大阪・奈良で煉瓦煙突の破損が多かった。
288	1899 11 25 (明治 32) (03 h 43 m) 31.9°N 132.0°E M7.1 [2] (03 h 55 m) 32.7°N 132.3°E M6.9 宮崎県沖: 宮崎・大分で家屋が小破し、土蔵が倒壊した。大分では 2 回目の方が強かった。[-1]
289	1900 3 22 (明治 33) 35.8°N 136.2°E M5.8 [3]

番号	西暦(日本暦) 北緯 東経 M=マグニチュード/地域:(名称:)被害摘要
290	福井県中部: 鮎江町・吉川村で被害が最も多かった。県全体で家屋全壊 2, 半壊 10, 破損 488 など。
291	1900 5 12 (明治 33) 38.7°N 141.1°E M7.0 [3] 宮城県北部: 遠田郡で最も激しく、県全体で死傷 17, 家屋全壊 44, 半壊 48, 破損 1474。
292	1900 11 5 (明治 33) 33.9°N 139.4°E M6.6 [3] 三宅島付近: 4 日より前震があった。御蔵島・三宅島で海岸の崩壊などがあった。神津島で家屋全壊 2, 半壊 3。
293	1901 8 9 (明治 34) 40.5°N 142.5°E M7.2 [3] 8 10 40.6°N 142.3°E M7.4 青森県東方沖: 青森県で死傷 18, 木造漁家 8, 秋田・岩手でも被害があった。宮古に波高 60 cm の津波があった。[0]
294	1902 1 30 (明治 35) 40.5°N 141.3°E M7.0 [3] 青森県東部: 三戸・七戸・八戸などで倒壊家屋 3, 死 1。前の地震の余震か?
295	1905 6 2 (明治 38) 34.1°N 132.5°E M7 1/4 [3] 安芸灘:『芸予地震』: 広島・呉・松山付近で被害が大きく、広島県で家屋全壊 56, 死 11, 愛媛県で家屋全壊 8, 煉瓦造建物・水道管・鉄道の被害が多かった。1903 年以来、この近くで地震が多かった。
296	1905 6 7 (明治 38) 34.8°N 139.3°E M5.8 [2] 伊豆大島: 5 日から 200 回以上前震があった。破壊家屋 3, 道路・石垣の崩壊が多かった。
297	1909 3 13 (明治 42) (08 h 19 m) 34.5°N 141.5°E M6.7 [2] (23 h 29 m) 34.5°N 141.5°E M7.5 房総半島沖: あとの方が強く、横浜で煙突・煉瓦壁の崩壊などの被害があった。
298	1909 8 14 (明治 42) 35.4°N 136.3°E M6.8 [4] 滋賀県東部:『江濃(姉川)地震』: 虎姫付近で被害が最大。滋賀・岐阜両県で死 41, 住家全壊 978, 姉川河口の湖底が数十 m 深くなった。
299	1909 8 29 (明治 42) 26°N 128°E M6.2 [3] 沖縄島付近: 那覇・首里で家屋全壊 6, 死 1, その他で全半壊 10, 死 1.
300	1909 11 10 (明治 42) 32.3°N 131.1°E M7.6 [3] 宮崎県西部: 宮崎市付近で被害が大きく、宮崎・大分・鹿児島・高知・岡山・広島・熊本の各県に被害があった。家屋全壊 4, 大きなやや深発地震で、深さ約 150 km, 従来, 日向灘とされていたもの。
301	1910 7 24 (明治 43) 42.5°N 140.9°E M5.1 [2] 胆振西部: 15 日以来地震頻発, この地震で虻田村で半壊・破損 15, その他でも小被害があった。この約 7 時間半後, 有珠山が爆発した。
302	1911 6 15 (明治 44) 28.0°N 130.0°E M8.0 [3] 奄美大島付近:『喜界島地震』: 有感域は中部日本に及び, 喜界島・沖縄島・奄美大島に被害があった。死 12, 家屋全壊 422, この地域最大の地震。[0]
303	1913 6 29 (大正 2) 31.6°N 130.3°E M5.7 [2] 鹿児島県西部: 翌日再震(M 5.9), この方が強かった。両方で家屋倒壊 1, 地鳴りを伴った。
	1914 1 12 (大正 3) 31.6°N 130.6°E M7.1 [4]

番号	西暦(日本暦) 北緯 東経 M=マグニチュード/地域:(名称:)被害摘要
304	鹿児島県中部:『桜島地震』:桜島の噴火で発生した地震。鹿児島市で住家全倒39、死13、鹿児島郡で死22余。小津波があった。[1] 1914 3 15 (大正 3) 39.5°N 140.4°E M7.1 [4]
	秋田県南部:『仙北地震』:仙北郡で最もひどく、全体で死94、家屋全潰640。地割れや山崩れが多かった。
305	1914 3 28 (大正 3) 39.2°N 140.4°E M6.1 [3]
	秋田県南部:前の地震の最大余震。沼館町で家屋全潰数戸。
306	1915 3 18 (大正 4) 42.1°N 143.6°E M7.0 [3]
	十勝沖:芽室村字美生村と戸萬村で家屋倒壊、死各1。
307	1915 11 16 (大正 4) 35.4°N 140.3°E M6.0 [2]
	房総半島:下香取郡万才村・長生郡西村・その他で崖崩れがあり、傷5、人家・物置の潰れがあった。群発地震で、12日から地震が続いていた。
308	1916 2 22 (大正 5) 36.5°N 138.5°E M6.2 [3]
	群馬県西部:浅間山麓で激しく、嬬恋村で山崩れ、家屋全潰7。その他、大笹・大前などで半潰3、破損109、土蔵破損164。
309	1916 11 26 (大正 5) 34.6°N 135.0°E M6.1 [3]
	兵庫県南岸:死1、家屋倒壊3。付近に軽い被害があった。有馬温泉の泉温1°C上がる。
310	1917 5 18 (大正 6) 35.0°N 138.1°E M6.3 [3]
	静岡県中部:死2、煉瓦壟・煉瓦煙突の被害が多かった。志田順による発震機構の先駆的な研究で知られる地震。
311	1918 9 8 (大正 7) 45 ½°N 152°E M8.0 [2]
	ウルップ島沖:沼津まで地震を感じる。津波の波高、ウルップ島岩美湾で6~12m、根室1m、父島1.5mなど。ウルップ島で溺死24。[0]
312	1918 11 11 (大正 7) (02 h 59 m) 36.5°N 137.9°E M6.1 [3] (16 h 04 m) 36.5°N 137.9°E M6.5
	長野県北部:『大町地震』:震害があったのは大町および付近の村で、家屋全潰6、半潰破損2852、非住家全潰16。2回目の方が強かった。大町を中心に15cmほどの土地の隆起があった。
313	1921 12 8 (大正 10) 36.0°N 140.2°E M7.0 [2]
	茨城県南部:『龍ヶ崎地震』:千葉・茨城県境付近に家屋破損・道路亀裂などの小被害があった。從来、龍ヶ崎付近の地震とされていたもの。
314	1922 4 26 (大正 11) 35.2°N 139.8°E M6.8 [3]
	千葉県西岸:『浦賀水道地震』:東京湾沿岸に被害があり、東京・横浜で死各1。家屋・土蔵などに被害があった。
315	1922 12 8 (大正 11) (01 h 50 m) 32.7°N 130.1°E M6.9 [4] (11 h 02 m) 32.7°N 130.1°E M6.5
	橘湾:『島原(千々石湾)地震』:被害はおもに島原半島南部・天草・熊本方面。長崎県で死26、住家全潰195、非住家全潰459。このうち2回目の地震による死3。
316	1923 9 1 (大正 12) 35.3°N 139.1°E M7.9 [7]
	神奈川県西部:『関東地震』:『関東大震災』:東京で観測した最大振幅14~20

番号	西暦(日本暦) 北緯 東経 M=マグニチュード/地域:(名称:)被害摘要
317	cm。地震後火災が発生し被害を大きくした。全体で死・不明10万5千余、住家全潰10万9千余、半潰10万2千余、焼失21万2千余(全半潰後の焼失を含む)。山崩れ・崖崩れが多い。房総方面・神奈川南部は隆起し、東京付近以西・神奈川北方は沈下した。相模湾の海底は小田原-布良線以北は隆起、南は沈下した。関東沿岸に津波が襲来し、波高は熱海で12m、相模で9.3mなど。[2] 1924 1 15 (大正 13) 35.3°N 139.1°E M7.3 [4]
	神奈川県西部:『丹沢地震』:東京・神奈川・山梨・静岡各県に被害があり、死19、家屋全潰1200余。特に神奈川県中南部に被害が著しかった。
318	1925 5 23 (大正 14) 35.6°N 134.8°E M6.8 [5]
	兵庫県北部:『但馬地震』:円山川流域で被害多く、死428、家屋全潰1295、焼失2180。河口付近に長さ1.6km、西落ちの小断層二つを生じた。葛野川の河口が陥没して海となった。
319	1927 3 7 (昭和 2) 35.6°N 134.9°E M7.3 [6]
	京都府北部:『北丹後地震』:被害は丹後半島の頸部が最も激しく、淡路・福井・岡山・米子・徳島・三重・香川・大阪に及ぶ。全体で死2925、家屋全潰12584(住家5106、非住家7478)。郷村断層(長さ18km、水平ずれ最大2.7m)とそれに直交する山田断層(長さ7km)を生じた。測量により、地震に伴った地殻の変形が明らかになった。[-1]
320	1927 10 27 (昭和 2) 37.5°N 138.8°E M5.2 [2]
	新潟県中越地方:『関原地震』:局部的強震。傷2、家屋半潰23。宮本村の田圃内に石油ガス噴出口を生じた。
321	1930 10 17 (昭和 5) 36.4°N 136.3°E M6.3 [2]
	石川県西方沖:片山津で死1。ほかでは煙突破損等小被害、砂丘による崖崩れなど。
322	1930 11 26 (昭和 5) 35.0°N 139.0°E M7.3 [5]
	静岡県伊豆地方:『北伊豆地震』:2~5月に伊東群発地震。この月11日より前震があり、余震も多かった。死272、家屋全潰2165。山崩れ・崖崩れが多く、丹那断層(長さ35km、横ずれ最大2~3m)とそれに直交する姫之湯断層などを生じた。
323	1931 9 21 (昭和 6) 36.2°N 139.2°E M6.9 [3]
	埼玉県北部:『西埼玉地震』:死16、家屋全潰207(住家76、非住家131)。
324	1931 11 2 (昭和 6) 31.8°N 132.0°E M7.1 [3]
	日向灘:宮崎県で家屋全潰4、死1。鹿児島県で家屋全潰1。室戸で津波85cm。[-1]
325	1933 3 3 (昭和 8) 39.1°N 145.1°E M8.1 [6]
	三陸沖:『三陸沖地震』:震害は少なかった。津波が太平洋岸を襲い、三陸沿岸で被害は甚大。死・不明3064、家屋流失4034、倒壊1817、浸水4018。波高は綾里湾で28.7mにも達した。日本海溝付近で発生した巨大な正断層型地震と考えられている。[3]
326	1933 9 21 (昭和 8) 37.1°N 137.0°E M6.0 [3]
	能登半島沖:石川県鹿島郡で死3、家屋倒壊2、破損143、ほかの被害があった。富山県でも傷2。

番号	西暦(日本暦) 北緯 東経 M=マグニチュード/地域:(名称:)被害摘要
327	1935 7 11 (昭和 10) 35.0°N 138.4°E M6.4 [3] 静岡県中部:『静岡地震』:静岡・清水に被害が多く、死9、住家全壊363、非住家全壊451。清水港で岸壁・倉庫が大破、道路・鉄道に被害があった。
328	1936 2 21 (昭和 11) 34.5°N 135.7°E M6.4 [3] 奈良県地方:『河内大和地震』:死9、住家全壊6、半壊53。地面の亀裂や噴砂・湧水現象も見られた。
329	1936 11 3 (昭和 11) 38.3°N 142.1°E M7.4 [3] 宮城県沖:『宮城県沖地震』:宮城・福島両県で非住家全壊3、その他の小被害。小津波があった。[-1]
330	1936 12 27 (昭和 11) 34.3°N 139.3°E M6.3 [3] 新島・神津島近海:新島・式根島で死3、民家全壊39、半壊473。崖崩れが多く、26日頃から前震があった。
331	1938 5 23 (昭和 13) 36.6°N 141.3°E M7.0 [2] 茨城県沖:小名浜付近の沿岸と福島・郡山・白川・若松付近に被害があった。福島県で家屋の被害250など。茨城県磯原で土蔵倒壊1。小津波があった。[-1]
332	1938 5 29 (昭和 13) 43.5°N 144.4°E M6.1 [3] 釧路支庁北部:『屈斜路湖地震』:家屋倒壊5、死1。屈斜路湖付近で小被害。[-1]
333	1938 6 10 (昭和 13) 25.6°N 125.0°E M7.2 [1] 東シナ海:津波来襲、平良港で振幅1.5m。棧橋流失し、帆船に被害があった。[1]
334	1938 11 5 (昭和 13) 36.9°N 141.9°E M7.5 [3] 11 5 37.4°N 141.5°E M7.3 11 6 37.4°N 141.9°E M7.4 福島県沖:『福島県沖地震』:この後年末までにM7前後の地震が多発した。福島県下で死1、住家全壊4、非住家全壊16。小名浜・鮎川などで約1mの津波。[0]
335	1939 3 20 (昭和 14) 32.1°N 131.7°E M6.5 [2] 日向灘:大分県沿岸で小被害、宮崎県で死1。小津波があった。[-1]
336	1939 5 1 (昭和 14) 39.9°N 139.8°E M6.8 [4] 秋田県沿岸北部:『男鹿地震』:2分後にもM6.7の地震があった。半島頭部で被害があり、死27、住家全壊479など。軽微な津波があった。半島西部が最大44cm隆起した。[-1]
337	1940 8 2 (昭和 15) 44.4°N 139.8°E M7.5 [3] 北海道北西沖:『積丹半島沖地震』:震害はほとんどなく、津波による被害が大きかった。波高は、羽幌・天塩2m、利尻3m、金沢・宮津1m。天塩河口で溺死10。[2]
338	1941 7 15 (昭和 16) 36.7°N 138.2°E M6.1 [3] 長野県北部:長野市北東の村々に被害があり、死5、住家全壊29、半壊115、非住家全壊48。
339	1941 11 19 (昭和 16) 32.1°N 132.1°E M7.2 [3] 日向灘:大分・宮崎・熊本の各県で被害があり、死2、家屋全壊27。九州東岸・四国西岸に津波があり、波高は最大1m。[1]

番号	西暦(日本暦) 北緯 東経 M=マグニチュード/地域:(名称:)被害摘要
340	1943 3 4 (昭和 18) 35.4°N 134.1°E M6.2 [3] 鳥取県東部:翌日にもほぼ同じ所に再震(M6.2)、両方で傷11、建物倒壊68、半壊515。
341	1943 8 12 (昭和 18) 37.3°N 139.9°E M6.2 [2] 福島県会津地方:『田島地震』:崖崩れや壁の剥落など小被害があった。
342	1943 9 10 (昭和 18) 35.5°N 134.2°E M7.2 [5] 鳥取県東部:『鳥取地震』:鳥取市を中心に被害が大きく、死1083、家屋全壊7485、半壊6158。鹿野断層(長さ8km)、吉岡断層(長さ4.5km)を生じた。地割れ・地変が多かった。
343	1943 10 13 (昭和 18) 36.8°N 138.2°E M5.9 [3] 長野県北部:死1、住家全壊14、半壊66、非住家全壊20。その他、道路の亀裂などがあった。
344	1944 12 7 (昭和 19) 33.6°N 136.2°E M7.9 [5] 紀伊半島沖:『東南海地震』:静岡・愛知・三重などで合わせて死・不明1223、住家全壊17599、半壊36520、流失3129。遠く長野県飯鰭盆地での住家全壊12などを含む。津波が各地に襲来し、波高は熊野灘沿岸で6~8m、遠州灘沿岸で1~2m。紀伊半島東岸で30~40cm地盤が沈下した。[3]
345	1945 1 13 (昭和 20) 34.7°N 137.1°E M6.8 [6] 三河湾:『三河地震』:規模の割に被害が大きく、死2306、住家全壊7221、半壊16555、非住家全壊9187。特に幡豆郡の被害が大きかった。深溝断層(延長9km)、上下ずれ最大2mの逆断層)を生じた。津波は蒲郡で1mなど。[-1]
346	1945 2 10 (昭和 20) 40.9°N 142.4°E M7.1 [3] 青森県東方沖:青森県で家屋倒壊2、死2、八戸などで微小被害、津波全振幅35cm。[-1]
347	1946 12 21 (昭和 21) 32.9°N 135.8°E M8.0 [5] 紀伊半島沖:『南海地震』:被害は中部以西の日本各地にわたり、死1330、家屋全壊11591、半壊23487、流失1451、焼失2598。津波が静岡県より九州にいたる海岸に来襲し、高知・三重・徳島沿岸で4~6mに達した。室戸・紀伊半島は南上がりの傾動を示し、室戸で1.27m、潮岬で0.7m上昇、須崎・甲浦で約1m沈下。高知付近で田園15km ² が海面下に没した。[3]
348	1947 9 27 (昭和 22) 24.7°N 123.2°E M7.4 [3] 与那国島近海:石垣島で死1、西表島で死4。瓦の落下・地割れ・落石などがあった。震央は国際地震報による。
349	1947 11 4 (昭和 22) 43.8°N 141.0°E M6.7 [1] 北海道西方沖:北海道の西岸に津波があり、波高は利尻島脊形で2m、羽幌付近で0.7m。小被害があった。[1]
350	1948 6 15 (昭和 23) 33.7°N 135.3°E M6.7 [3] 紀伊水道:和歌山県西牟婁地方で被害が大きかった。死2、家屋倒壊60。道路・水道などに被害があった。
351	1948 6 28 (昭和 23) 36.2°N 136.3°E M7.1 [6] 福井県嶺北地方:『福井地震』:被害は福井平野およびその付近に限られ、死3769、家屋全壊36184、半壊11816、焼失3851。土木構築物の被害も大きかった。南北に地割れの連続としての断層(延長約25km)が生じた。

番号	西暦(日本暦) 北緯 東経 M=マグニチュード/地域:(名称:)被害摘要
352	1949 7 12 (昭和 24) 34.1°N 132.8°E M6.2 [3] 安芸灘:呉で死2。壁の亀裂、屋根瓦の落下など小被害があった。
353	1949 12 26 (昭和 24) (08 h 17 m) 36.7°N 139.7°E M6.2 [3] (08 h 25 m) 36.7°N 139.8°E M6.4 栃木県北部:「今市地震」:死10、住家全壊290、半壊2994、非住家全壊618。被害は石造建物が多く、山崩れも多かった。
354	1952 3 4 (昭和 27) 41.7°N 144.2°E M8.2 [4] 釧路沖:「十勝沖地震」:北海道南部・東北北部に被害があり、津波が関東地方に及ぶ。波高は北海道で3m前後、三陸沿岸で1~2m。死28、不明5、家屋全壊815、半壊1324、流失91。[2]
355	1952 3 7 (昭和 27) 36.5°N 136.1°E M6.5 [3] 石川県西方沖:「大聖寺沖地震」:福井・石川両県で死7、家屋半壊4など。山崩れや道路の亀裂などもあった。
356	1952 7 18 (昭和 27) 34.5°N 135.8°E M6.7 [3] 奈良県地方:「吉野地震」:震源の深さ60km。和歌山・愛知・岐阜・石川各県にも小被害があった。死9、住家全壊20。春日大社の石灯籠1600のうち650倒壊。 1952 11 5 (昭和 27) 52.3°N 161.0°E Ms8.2 Mw9.0 [2] カムチャツカ半島沖:太平洋沿岸に津波、波高は1~3m程度。広範囲で家屋の浸水があり、三陸沿岸では漁業関係の被害があった。[1]
357	1953 11 26 (昭和 28) 34.0°N 141.7°E M7.4 [1] 房総半島南東沖:「房総沖地震」:伊豆諸島で道路亀裂、八丈島で鉄管亀裂など。関東沿岸に小津波、銚子付近で最大2~3m。[1]
358	1955 7 27 (昭和 30) 33.7°N 134.3°E M6.4 [2] 徳島県南部:死1、傷8。山崩れ多く、道路の破損・亀裂、トンネル崩壊などの小被害があった。
359	1955 10 19 (昭和 30) 40.3°N 140.2°E M5.9 [2] 秋田県沿岸北部:「二ツ井地震」:被害は二ツ井町・響村に限られ、傷4、住家半壊3、非住家全壊1、半壊310など。
360	1956 9 30 (昭和 31) 38.0°N 140.6°E M6.0 [2] 宮城県南部:白石付近で死1、非住家倒壊3、その他小被害があった。
361	1957 11 11 (昭和 32) 34.3°N 139.3°E M6.0 [3] 新島・神津島近海:新島・式根島で石造家屋に被害(全壊2)があった。6日頃より前震。
362	1958 11 7 (昭和 33) 44.3°N 148.5°E M8.1 [1] 択捉島付近:釧路地方で電信線・鉄道・道路に小被害があった。太平洋岸各地に津波があり、小被害。[1]
363	1959 1 31 (昭和 34) (05 h 38 m) 43.4°N 144.4°E M6.3 [3] (07 h 16 m) 43.5°N 144.5°E M6.1 釧路支庁北部:「弟子屈地震」:後のもので被害が生じた。弟子屈町・阿寒町・阿寒湖畔で被害が多く、煙突の倒壊・破損が多かった。建物全壊2。
---	1960 5 23 (昭和 35) 39.5°S 74.5°W Ms8.5 Mw9.5 [4] チリ沖:「チリ地震津波」:24日2時頃から津波が日本各地に襲来、波高は三

番号	西暦(日本暦) 北緯 東経 M=マグニチュード/地域:(名称:)被害摘要
364	陸沿岸で5~6m、その他で3~4m。北海道南岸・三陸沿岸・志摩半島付近で被害が大きく、沖縄でも被害があった。日本全体で死・不明142(うち沖縄で3)、家屋全壊1500余、半壊2千余。[4]
365	1961 2 2 (昭和 36) 37.4°N 138.8°E M5.2 [3] 新潟県中越地方:典型的な局地地震で、被害は直径2kmの範囲に集中した。死5、住家全壊220、半壊465。
366	1961 2 27 (昭和 36) 31.6°N 131.9°E M7.0 [3] 日向灘:宮崎・鹿児島両県で死2、建物全壊3。九州から中部の沿岸に津波、波高は最高50cm。[0]
367	1961 8 12 (昭和 36) 42.9°N 145.3°E M7.2 [2] 釧路沖:釧路付近で家屋の一部破損11、木橋全壊1、その他小被害。[-1]
368	1961 8 19 (昭和 36) 36.1°N 136.7°E M7.0 [3] 石川県加賀地方:「北美渡地震」:福井・岐阜・石川3県に被害があった。死8、家屋全壊12、道路損壊120、山崩れ99。
369	1962 4 23 (昭和 37) 42.5°N 143.8°E M7.1 [2] 十勝沖:十勝川流域・釧路方面に被害が多かった。建物半倒壊2、その他の小被害があった。
370	1962 4 30 (昭和 37) 38.7°N 141.1°E M6.5 [3] 宮城県北部:「宮城県北部地震」:瀬峰付近を中心とする径40kmの範囲に被害が集中した。死3、住家全壊340、半壊1114。橋梁・道路・鉄道の被害が多かった。
371	1962 8 26 (昭和 37) 34.1°N 139.4°E M5.9 [2] 三宅島近海:8月24日に三宅島噴火、これに伴い地震があり、傷30、住家破壊141。翌年8月まで続いた。
372	1963 3 27 (昭和 38) 35.8°N 135.8°E M6.9 [3] 福井県沖:「越前岬沖地震」:敦賀・小浜間に小被害があった。住家全壊2、半壊4など。
373	1963 10 13 (昭和 38) 44.0°N 149.8°E M8.1 [1] 択捉島付近:津波があり、三陸沿岸で軽微な被害。花咲で1.2m、八戸で1.3mなど。[2]
374	1964 5 7 (昭和 39) 40.4°N 138.7°E M6.9 [3] 秋田県沖:青森・秋田・山形3県に民家全壊3などの被害があった。[-1]
375	1964 6 16 (昭和 39) 38.4°N 139.2°E M7.5 [4] 新潟県沖:「新潟地震」:新潟・秋田・山形の各県を中心に被害があり、死26、住家全壊1960、半壊6640、浸水15297、その他船舶・道路の被害も多かった。新潟市内の各所で噴砂水がみられ、地盤の液状化による被害が著しかった。石油タンクの火災が発生。津波が日本海沿岸一帯を襲い、波高は新潟県沿岸で4m以上に達した。粟島が約1m隆起した。[2]
376	1965 4 20 (昭和 40) 34.9°N 138.3°E M6.1 [3] 静岡県中部:「1965年静岡地震」:死2、傷4、住家一部破壊9。清水平野北部で被害が大きかった。

番号	西暦(日本暦) 北緯 東経 M=マグニチュード/地域:(名称:)被害摘要
377	長野県北部:『松代群発地震』:この日に松代皆神山付近に始まり、少しづつ活動域を広げていった。ほとんど終息した1970年末までに松代で有感地震62821回、うち震度5、4はそれぞれ9回、50回だった。被害を伴った地震は51回、全体で傷15、住家全壊10、半壊4、山崖崩れ60。最も規模の大きかった地震はM5.4で、総エネルギーは、M6.4の地震1個に相当する。この間に皆神山が1m隆起した。 1967 4 6 (昭和 42) 34.2°N 139.2°E M5.3 [3] 新島・神津島近海:神津島で傷3、式根島で住家全壊7、半壊9。
378	1968 2 21 (昭和 43) 32.0°N 130.7°E M6.1 [3] 鹿児島県薩摩地方:『えびの地震』:2時間ほど前にM5.7の前震、翌日にもM5.6の余震があった。死3、傷42、住家全壊368、半壊636。山崩れが多かった。3月25日にもM5.7とM5.4の地震があり、住家全壊18、半壊147。
379	1968 2 25 (昭和 43) 34.2°N 139.3°E M5.0 (最大地震) [3] 新島・神津島近海:24~27日の群発地震。式根島・神津島で住家全壊2、半壊4、一部破損1、道路損壊4、山(崖)崩れ6。
380	1968 4 1 (昭和 43) 32.3°N 132.5°E M7.5 [2] 日向灘:『1968年日向灘地震』:高知・愛媛で被害多く、死1、傷15、住家全壊1、半壊2、道路損壊18など。小津波があった。[1]
381	1968 5 16 (昭和 43) 40.7°N 143.6°E M7.9 [4] 青森県東方沖:『十勝沖地震』:青森を中心に北海道南部・東北地方に被害。死52、傷330、建物全壊673、半壊3004。青森県下で道路損壊も多かった。津波があり、三陸沿岸3~5m、襟裳岬3m、浸水529、船舶流失沈没127。コンクリート造建築の被害が目立った。[2]
382	1968 8 6 (昭和 43) 33.3°N 132.4°E M6.6 [2] 豊後水道:愛媛を中心に被害があり、傷22、家屋破損7、全壊1。道路の損壊や山崩れも多かった。
383	1969 9 9 (昭和 44) 35.8°N 137.1°E M6.6 [2] 岐阜県美濃中西部:死1、傷10、住家一部破損86。崖崩れが多かった。
384	1970 1 21 (昭和 45) 42.4°N 143.1°E M6.7 [3] 十勝支庁南部:傷32、住家全壊2、半壊7、一部破損139などの被害があった。
385	1970 10 16 (昭和 45) 39.2°N 140.8°E M6.2 [2] 岩手県内陸南部:傷6、住家半壊20、一部破損446、全壊1、山崖崩れ19などの被害があった。
386	1972 12 4 (昭和 47) 33.2°N 141.3°E M7.2 八丈島東方沖:『1972年12月4日八丈島東方沖地震』:八丈島と青ヶ島で落石・土砂崩れ・道路破壊などの被害。八丈島震度6だが、人的被害、建物の被害は軽微。[-1]
387	1973 6 17 (昭和 48) 43.0°N 146.0°E M7.4 [3] 根室半島南東沖:『根室半島沖地震』:根室・釧路地方に被害。全体で傷26、家屋全壊2、一部破損1。小津波があり、波高は花咲で2.8m、浸水275、船舶流失沈没10。[1]また、6月24日の余震(M7.1)で傷1、家屋一部破損2。小津波があった。[0]

番号	西暦(日本暦) 北緯 東経 M=マグニチュード/地域:(名称:)被害摘要
388	1974 5 9 (昭和 49) 34.6°N 138.8°E M6.9 [4] 伊豆半島南方沖:『伊豆半島沖地震』:伊豆半島南端に被害。死30、傷102、家屋全壊134、半壊240、全焼5。御前崎などに小津波。[-1]
389	1975 1 23 (昭和 50) 33.0°N 131.1°E M6.1 [3] 熊本県阿蘇地方:阿蘇山外輪山内にある一の宮町三野地区に被害が集中した。熊本県で傷10、建物全壊16、半壊17、道路損壊12、山崩れ15。
390	1975 4 21 (昭和 50) 33.1°N 131.3°E M6.4 [3] 大分県西部:傷22、住家全壊58、半壊93、道路被害182など。
391	1978 1 14 (昭和 53) 34.8°N 139.3°E M7.0 Mw6.6 [4] 伊豆大島近海:『伊豆大島近海地震』:死25、傷211、住家全壊96、半壊616、道路損壊1141、崖崩れ191。前震が活発で、当日午前、気象庁から地震情報が出されていた。伊豆半島で被害が大きく、翌15日の最大余震(M5.8)でも伊豆半島西部にかなりの被害が出た。[-1]
392	1978 6 12 (昭和 53) 38.2°N 142.2°E M7.4 Mw7.6 [4] 宮城県沖:『宮城県沖地震』:被害は宮城県に多く、全体で死28、傷1325、住家全壊1183、半壊5574、道路損壊888、山崖崩れ529。造成地に被害が集中した。ブロック塀などによる圧死18。[-1]
393	1980 6 29 (昭和 55) 34.9°N 139.2°E M6.7 Mw6.4 [2] 伊豆半島東方沖:群発地震の最中の最大地震。伊豆半島で家屋全壊1、一部破損17、傷7などの被害。神奈川でも傷1などの被害があった。[-1]
394	1982 3 21 (昭和 57) 42.1°N 142.6°E M7.1 Mw6.9 [3] 浦河沖:『浦河沖地震』:被害は浦河・静内に集中したが、札幌などでも微小被害が報告されている。傷167、建物全壊9、半壊16、一部破損174、鉄軌道被害45。小津波があった。[-1]
395	1983 5 26 (昭和 58) 40.4°N 139.1°E M7.7 Mw7.7 [4] 秋田県沖:『日本海中部地震』:被害は秋田県で最も多く、青森・北海道がこれに次ぐ。日本全体で死104(うち津波によるもの100)、傷163(同104)、建物全壊934、半壊2115、流失52、一部破損3258、船沈没255、流失451、破損1187。津波は早い所では津波警報発令以前に沿岸に到達した。石川・京都・島根など遠方の府県にも津波による被害が発生した。[2~3]
396	1983 8 8 (昭和 58) 35.5°N 139.0°E M6.0 Mw5.6 [2] 山梨県東部:丹沢山地で落石があり、死1、傷8。山梨・神奈川・東京・静岡の各県で傷合計33、家屋全半壊2。
397	1984 9 14 (昭和 59) 35.8°N 137.6°E M6.8 Mw6.2 [4] 長野県南部:『長野県西部地震』:王滝村に大きな被害をもたらした。死29、傷10、住家全壊・流出14、半壊73、一部破損565、道路損壊258など。死者および建物流出は主として王滝川・濁川の流域などに発生した大規模な崖崩れと土石流によるものである。
398	1987 3 18 (昭和 62) 32.0°N 132.1°E M6.6 Mw6.6 [2] 日向灘:死1、傷6のほか、建物・道路などに被害があった。
399	1987 12 17 (昭和 62) 35.4°N 140.5°E M6.7 Mw6.5 [3] 千葉県東方沖:千葉県を中心に被害があり、死2、傷161。住家全壊16、一部

番号	西暦(日本暦) 北緯 東経 M=マグニチュード/地域:(名称:)被害摘要
400	破損7万余のほか、道路などにもかなりの被害があった。 1993 1 15 (平成5) 42.9°N 144.4°E M7.5 Mw7.6 [3] 釧路沖:「釧路沖地震」:わが国では11年ぶりの震度6を釧路で記録、死2、傷967、建物や道路の被害もあった。北海道の下に沈み込む太平洋プレートの内部で発生した深さ約100kmの地震で、この型の地震としては例外的に規模が大きかった。
401	1993 7 12 (平成5) 42.8°N 139.2°E M7.8 Mw7.7 [5] 北海道南西沖:「北海道南西沖地震」:地震に加えて津波による被害が大きく、死202、不明28、傷323。特に地震後間もなく津波に襲われた奥尻島の被害は甚大で、島南端の青苗地区は火災もあって壊滅状態、夜10時すぎの間のなかで多くの人命、家屋等が失われた。津波の高さは青苗の市街地で10mを越えたところがある。[3]
402	1994 10 4 (平成6) 43.4°N 147.7°E M8.2 Mw8.3 [3] 北海道東方沖:「北海道東方沖地震」:北海道東部を中心に被害があり、傷437、住家全壊61、半壊348。津波は花咲で173cm。震源に近い択捉島では死・不明10など、地震と津波で大きな被害。[2]
403	1994 12 28 (平成6) 40.4°N 143.7°E M7.6 Mw7.7 [3] 三陸沖:「三陸はるか沖地震」:震度6の八戸を中心とした被害、死3、傷788、住家全壊72、半壊429。道路や港湾の被害もあった。弱い津波があった。[-1]
404	1995 1 17 (平成7) 34.6°N 135.0°E M7.3 Mw6.9 [6] 淡路島付近:「兵庫県南部地震」(Kobe earthquake):「阪神・淡路大震災」:活断層の活動によるいわゆる直下型地震。神戸、洲本で震度6だったが、現地調査により淡路島の一部から神戸市、芦屋市、西宮市、宝塚市にかけて震度7の地域があることが明らかになった。多くの木造家屋、鉄筋コンクリート造、鉄骨造などの建物のほか、高速道路、新幹線を含む鉄道線路なども崩壊した。被害は死6434、不明3、傷43792、住家全壊104906、半壊144274、全半焼7132など。早朝であったため、死者の多くは家屋の倒壊と火災による。
405	1995 4 1 (平成7) 37.9°N 139.2°E M5.6 Mw5.4 [3] 新潟県下越地方:豊浦町・水原町・笛神村などで傷82、住家全壊55、半壊181、一部破損1376。
406	1997 3 26 (平成9) 32.0°N 130.4°E M6.6 Mw6.1 [3] 鹿児島県薩摩地方:宮之城町・鶴田町・川内市などで傷36、住家全壊4、半壊31。最大震度5弱や4の余震が続いた。
407	1997 5 13 (平成9) 31.9°N 130.3°E M6.4 Mw6.0 [3] 鹿児島県薩摩地方:3月26日の地震と並行する断層による。川内市で震度6弱、傷43、住家全壊4、半壊25。
408	2000 6 26 (平成12) 34.0°N 139.4°E M6.5 Mw6.1 (7月1日最大地震) [3] 三宅島近海:この日に始まった三宅島の噴火に伴う群発地震。西方に拡大して活動の中心は神津島東方沖。8月末までにM5以上40地震、うちM6以上4地震が発生して松代群発地震を越える活動となった。全体で死1、傷15、住家全壊15、半壊20。

番号	西暦(日本暦) 北緯 東経 M=マグニチュード/地域:(名称:)被害摘要
409	2000 10 6 (平成12) 35.3°N 133.3°E M7.3 Mw6.7 [3] 鳥取県西部:「鳥取県西部地震」:陸域の横ずれ断層型地殻内地震。鳥取県境港市、日野町で震度6強(計測震度導入後初めて)、傷182、住家全壊435、半壊3101。M7級の地殻内地震にもかかわらず活断層が事前に指摘されておらず、明瞭な地表地震断層も現れなかった。
410	2001 3 24 (平成13) 34.1°N 132.7°E M6.7 Mw6.8 [3] 安芸灘:「芸予地震」:フィリピン海プレート内部の正断層型の地震。いわゆるスラブ内地震(深さ約50km)で、吳市の傾斜地などで被害が目立った。被害は死2、傷288、住家全壊70、半壊774。
411	2003 5 26 (平成15) 38.8°N 141.7°E M7.1 Mw7.0 [3] 宮城県沖:深さ約70kmのスラブ内地震、震央の位置から三陸南地震とも呼ばれる。傷174、住家全壊2、半壊21。深いため次の地震に比べ被害は小規模。
412	2003 7 26 (平成15) 38.4°N 141.2°E M6.4 Mw6.0 [2] 宮城県北部:陸域の逆断層型地殻内地震。同日に大きな前震M5.6と余震M5.5も起って連続地震と呼ばれた。M6級だが浅く、震源域に局的に大きな被害が出た。傷677、住家全壊1276、半壊3809。3ヶ所で震度6強を記録した。
413	2003 9 26 (平成15) 41.8°N 144.1°E M8.0 Mw8.3 [3] 釧路沖:「十勝沖地震」:太平洋プレート上面の逆断層型プレート境界地震で1952年とほぼ同じ場所。死1、不明1、傷849、住家全壊116、半壊368。最大震度6弱(道内9町村)、北海道および本州の太平洋岸に最大4m程度の津波。[2]
414	2004 10 23 (平成16) 37.3°N 138.9°E M6.8 Mw6.6 [4] 新潟県中越地方:「新潟県中越地震」:「新潟・神戸亞み集中帯」に属する活褶曲帯で発生した逆断層型地震。規模の大きな余震が多数発生(M6以上4余震)して被害を助長、死68、傷4805、住家全壊3175、半壊13810(2009年1月現在)。川口町で震度7(計測震度導入後初めて)、震源域の地質を反映して地すべりの被害が目立った。
415	2005 3 20 (平成17) 33.7°N 130.2°E M7.0 Mw6.6 [3] 福岡県西方沖:福岡県沿岸海域の左横ずれ断層型地殻内地震。最大震度は九州本土の6弱だが、玄界島ではそれ以上の可能性がある。死1、傷1204、住家全壊144、半壊353。
416	2005 8 16 (平成17) 38.2°N 142.3°E M7.2 Mw7.2 [2] 宮城県沖:日本海溝沿いや陸寄り(深さ42km)の逆断層型プレート境界地震で、1978年の震源域の南半分で発生。傷100、全壊1、半壊0。最大震度6弱(宮城県川崎町)、東北地方太平洋岸で最大13cm(石巻市)の津波。[-1]
417	2007 3 25 (平成19) 37.2°N 136.7°E M6.9 Mw6.7 [3] 能登半島沖:「能登半島地震」:海陸境界域の横ずれ成分を含む逆断層型地殻内地震。死1、傷356、住家全壊686、半壊1740(2009年1月現在)。最大震度6強(石川県内3市町)、珠洲と金沢で0.2mの津波。[-1]
418	2007 7 16 (平成19) 37.6°N 138.6°E M6.8 Mw6.6 [3] 新潟県上中越沖:「新潟県上中越沖地震」:新潟県沿岸海域の逆断層型地殻内地震。2004年中越地震に近いが余震活動は不活発。震源域内の原子力発電所が被

番号	西暦(日本暦) 北緯 東經 M=マグニチュード/地域:(名称:)被害摘要
419	災した初めての例。死 15, 傷 2346, 住家全壊 1331, 半壊 5709(2009 年 10 月現在)。最大震度 6 強(新潟県内 3 市村, 長野県 1 町), 地盤変状・液状化なども目立った。日本海沿岸で最大 35 cm(柏崎)の津波。[-1] 2008 6 14 (平成 20) 39.0°N 140.9°E M7.2 Mw6.9 [4]
420	岩手県内陸南部:「岩手・宮城内陸地震」:岩手・宮城県境付近の山間地での逆断層型地殻内地震。死 17, 不明 6, 傷 426, 住家全壊 30, 半壊 146(2010 年 6 月現在)。最大震度 6 強(岩手県 1 市, 宮城県 1 市)や 4000 ガル以上の加速度などが観測されたが, 建物被害よりも地すべりなどの斜面災害が目立った。 2008 7 24 (平成 20) 39.7°N 141.6°E M6.8 Mw6.8 [2]
421	岩手県沿岸北部:太平洋プレートの正断層型スラブ内地震(深さ 108 km)。死 1, 傷 211, 住家全壊 1, 半壊 0(2009 年 1 月現在)。最大震度 6 弱(岩手県 1 村, 青森県 3 市町)。6 強は後に取り消し)が観測されたが, 短周期の揺れのため被害は比較的少なかった。 2009 8 11 (平成 21) 34.8°N 138.5°E M6.5 Mw6.2* [2]
422	駿河湾:横ずれ成分を含む逆断層型スラブ内地震(深さ 23 km)。初めて東海地震観測情報が出されたが, 東海地震には結びつかないと判定された。死 1, 傷 319, 住家全壊 0, 半壊 6(2010 年 3 月現在)。最大震度 6 弱(静岡県 4 市)で, 家具などによる負傷が多くあった。最大 0.4 m(御前崎)の津波。[-1] 2011 3 11 (平成 23) 38.1°N 142.9°E M9.0 Mw9.1 [7]
423	三陸沖:「東北地方太平洋沖地震」(Tohoku earthquake):「東日本大震災」:日本海溝沿いの沈み込み帯の大部分, 三陸沖中部から茨城県沖までのプレート境界を震源域とする逆断層型超巨大地震。3 月 9 日に M7.3 (Mw7.4) の前震, 震源域内や付近の余震・誘発地震は M7.0 以上が 6 回, M6.0 以上が 96 回, 死 16019, 不明 3805, 傷 6121, 住家全壊 118621, 半壊 181801(余震・誘発地震を含む; 2011 年 10 月現在)。死者の 90 % 以上が水死といわれ, 被害の多くは巨大津波(観測機器は振り切れ, 現地調査によれば最大 35 m 以上)によるもの。最大震度 7(宮城県栗原市), 6 強が宮城県 13 市町村, 福島県 11 市町, 茨城県 8 市, 栃木県 5 市町だが, 揺れによる被害は比較的大きくなかった。この沈み込み帯では未知の規模であったが, 869 年貞觀の三陸沖地震と 1896 年三陸沖地震クラスの津波地震が合わせて再来したとの見方がある。[4] 2011 3 12 (平成 23) 37.0°N 138.6°E M6.7 Mw6.3 [3]
424	長野・新潟県境:東北地方太平洋沖地震の遠方誘発地震で逆断層型地殻内地震。傷 57, 住家全壊 68, 半壊 387(長野県・新潟県による; 2011 年 8 月現在)。最大震度 6 強(長野県栄村), 震度 6 弱が宮城県 2 市町。 2011 4 7 (平成 23) 38.2°N 141.9°E M7.1 Mw7.1 [3]
425	宮城県沖:東北地方太平洋沖地震の震源域内誘発地震だが, 太平洋プレートの逆断層型スラブ内地震(深さ 66 km)。死 4, 傷 296, 住家全壊 36 以上, 半壊 27 以上(消防庁・宮城県による; 2011 年 8 月現在)。最大震度 6 強(宮城県仙台市・栗原市), 6 弱が宮城県 15 市町村, 岩手県 6 市町。 2011 4 11 (平成 23) 36.9°N 140.7°E M7.0 Mw6.6 [3]
	福島県浜通り:東北地方太平洋沖地震の震源域付近誘発地震で正断層型地殻内地震。既知の活断層(井戸沢断層)の近傍で地表地震断層が現れた。死 4, 傷 10

番号	西暦(日本暦) 北緯 東經 M=マグニチュード/地域:(名称:)被害摘要
426	(消防庁・福島県による; 2011 年 8 月現在)。最大震度は 6 弱(福島県 3 市町村, 茨城県 1 市)。 2011 6 30 (平成 23) 36.2°N 138.0°E M5.4 Mw5.0* [2] 長野県中部:東北地方太平洋沖地震の遠方誘発地震で横ずれ断層型地殻内地震。糸魚川-静岡構造線断層帯の既知の活断層(午伏寺断層)の近傍で発生した。死 1, 傷 17, 住家半壊 18(長野県による; 2011 年 8 月現在)。最大震度は 5 強(長野県松本市)。

(2011 年 10 月現在)

融解熱	504	流星群	94, 95
有機化学反応	534~539	流星スペクトル	95
有機化合物		リュドベリ定数	373
の ¹ H 核の化学シフト	496	量子化ホール抵抗	367
の ¹³ C 核の化学シフト	497	両生類	831
有機物質		の酸素消費量	884
の化学式	525~528	の生殖	848
の反応	534~539	の胚・幼生成長速度	849
有機溶媒	.542, 543	緑藻類	838
有極性分子	424	臨界圧力(気体の)	412
有効波長(星の観測システム)	121	臨界温度	
有効半径(金属原子)	498	気体の――	412
有機動物	834	超伝導体の――	421
融点		臨界磁場	421
化合物の――	408	臨界周波数	814, 817
単体の――	407	臨界定数(気体の)	412
誘電体	423, 424	臨界密度	412
誘電率	366, 368, 374	輪形動物	834
遊離基(ラジカル)反応	533, 538	リン脂質	552
雪	177, 238~252	リンパ球	881
ユリウス日	1, 75	ルクス(→照度)	
ユリウス暦	75	ルジャンドル陪関数	582
輸率(陽イオン)	510	ルーメン(→光束)	
夜明	2, 30	暦表時	363
溶解度	512	暦表秒	363
気体の水に対する――	515	レーザー	454~456
無機物の水に対する――	512, 513	レセプター	878
有機物の水に対する――	514	レッドリスト	994
溶解度積(難溶塩の)	515	レプトン	488, 489
溶媒	532, 543	連星	
横波速度	434, 435	の実視等級	118, 119
ら 行		の周期	118~120
ラジアン(→平面角)		六フッ化硫黄	936, 1003
ラジオアイソotope(→放射性核種)		ロランC	156, 157
ラニーニャ現象	931	わ 行	
卵数		惑星	
魚類の――	848	に関する定数	78, 79
昆虫の――	850	の衛星	78, 80, 81
力学時	154	の赤緯	49~56
陸水	958	の赤経	49~56
リサイクル	1021	の大気	87
離心率		の出入	49~56
衛星の――	81	の南中	49~56
連星の――	118, 119	の環	79
惑星の――	78	惑星軌道要素	78, 79
立体角	363~365	惑星現象	2, 60
立体規則性	541	惑星歳差	159
留(→惑星現象)		惑星状星雲	
粒子速度	437	惑星探査機	166
粒状斑(太陽の)	96	腕足動物	833
流星雨	95		

自然科学研究機構 国立天文台

<http://www.nao.ac.jp/>

理科年表オフィシャルサイト

<http://www.rikanenpyo.jp/>

理科年表へのご意見・ご要望はこちらにお寄せください。

<http://www.rikanenpyo.jp/sitsumonbako/about.html>

理科年表 平成24年

平成23年11月30日発行

編纂者 自然科学研究機構 国立天文台

代表者 台長 観山正見

発行者 吉田 明彦

発行所 丸善出版株式会社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町二丁目17番

編集：電話(03)3512-3265/FAX(03)3512-3272

営業：電話(03)3512-3256/FAX(03)3512-3270

<http://pub.maruzen.co.jp/>

© National Astronomical Observatory of Japan, 2011

組版・有限会社悠朋舎/印刷 製本・大日本印刷株式会社

ISBN 978-4-621-08438-0 C3040

Printed in Japan

本書の無断複写は著作権法上での例外を除き禁じられています。